

しめ得なかつた、そこで紐育のウォール街で、織る梭の如き自動車の波浪の中を泳ぎ廻りながら、八十三時間踊りつゞけたといふダンサーが現はれるならば、今度はブロードウエーのスカイ・スクレパーの上で、そのレコードを摩さんと企圖されて来るのである。

ベルリン市に於いて四十日間一切食物に手を觸れなかつたといふ、アドルフ・グレックスン博士の断食競争が行はれるかと思ふと、反対に大食競争が行はれ、大飲み競争が行はれる、ゴムの長靴をコップ代用にしてビールをあふり、如何にそれを早く飲み干すかの競争が行はれ、世界の選手権を獲得したマダレス氏の如きは、三リットルを十七秒間に飲み干した。スコットランドの大食競争では、十三枚のピフテキーが平げられたといふ、然るに又彼等は進んで悪食競争を始め出して来た、いも蟲・蚯蚓・なめくぢ・土鼠・蜘蛛・蠅・うち蟲、さては土、石までも平然として食つて了ひ、その悪食を競ひ出すに至つたのであつた。

又若き婦人は、その脚線美もあらはに、トーテム・ボールの上に登つて耐久競争をやれば、サン・フランシスコのピリー・ハジヤク氏は、ピアノの連続演奏で百八十七時間五十九分のレコードを作る。ルシール・ゲーツ嬢はバター作り及び唐もろこしの皮むき競争で世界の選手権をば

獲得する。ラチオの聞き競争、髭のばしの競争、早口競争、演説競争、蠅捕競争、散髪競争、光頭競争、登山耐寒競争、遂には煙突上の滞空レコード百三十時間二十二分といふ珍世界レコードが作り出され、全國の視聽をば、川崎富士紡の煙突に集め、その労働爭議の解決をば、助長せしめるまでに至つたのであつた。

x

斯くして人間の心的活動に作用する加速度性は、より奇抜なる、即ちより刺戟的なる耐久競争を穿鑿し出さんことに努め、その奇抜な未経験性をば、遂には變態的現象の中に求め、或は冒險的現象の中に拾ひ出さんとして来るのである。成程、今迄の耐久競争たるや、その多くはナンセンスであり、或はグロテスクを狙つてゐた、然るにその刺戟に馴れ來つた現代人の心理は、その強烈性を變態的或は冒險的現象の中に求め出すのみならず、更により強烈なる刺戟を、犯罪性の中に求め出して來た。何故ならば最も甚だしき冒險は論ずるまでもなく犯罪であるからであり、そして最も激甚なる變態は、病的であり、獸的であり、惡魔的であるからである。

將來の耐久競争、即ち一九三一年型の耐久競争は、その尖端をばこの犯罪に求め、病的・獸的・惡魔的なる現象に求め出して來ることになるであらう。だから吾々は次の時期に於いて惡の華盛んなる時代をば、豫想しなければならぬ。故に吾々人間の自惚心は、遂に吾々人間をして甚だしき墮落に導き來るものであつて、そこに亦吾々は、ロンプロゾーの云ふが如く、「現代文明が洋の文明である」ことの意義を、今にして考慮し置くの必要を痛感するものである。

流行の診断

x x 11 x x

X
今日の流行を以て明日の流行を推知する爲めには、少くとも社会現象が、一定の法則に従つて動くものであるといふことを、その前提条件とせねばならない。若しそこに一定の法則性がないならば、その豫想はたゞ出鱈目であるか、さもなければ——一寸説明することに困難である——直覺とかいふものゝ作用を俟つより外はない。

X
所が社会現象は、幾多無数の細線によつて織られてゐる織物の如きものであつて、その原因を一々數へあげると云ふことは、非常に至難であるが、然し所謂「大数の法則」によつて、その大體の法則をば掴むことが出来る、又そればかりではなく、その原因の主なるものを辿つて、分析に分析を重ね、極くそれを單純化して行く時には、遂にその個々に働く因果關係をば知ることが出来るのである。そして社会を構成してゐるものは個人であり、従つて總ての個人に作

用してゐる所の法則は、その量が社会的であるといふことによつて、所謂辨證法的に個人的現象から變質して社会現象になるのである。それ故に吾々はこの個人的現象の法則より、社会的現象の法則をば類推し得るのであつて、社会學者のいふが如く、又社会学が科學として成立してゐるが如く、社会現象にも亦法則性が認識されねばならない。

* Tarde, L'Interpsychologie, Pp. 1-2.

X

では流行に就いて、如何なる法則があげられ得るであらうか、私は茲に三つの者を數へ上げることが出来ると思ふ。その一つは個人的現象の理法であると同時に、社会的現象の理法となり得る所の「ウエベル・フェヒネルの法則」である。そしてそれは、「感覺を算術級的に與へる爲めには、刺戟を幾何級数的に與へねばならない」といふことである。例へば、スカートの一寸短いのが流行して、人々がそれにエロをば感じ出して來ると、そのエロテックの感じをづうつと持續して行く爲には、倍加的にそのスカートを短かくし、いつしか膝小頭を出し、太股をあら

はにし、遂にはそこに腕時計ならぬ股時計をはめ出さねばならなくなる。然るに人間の身體には悲しいかな極限がある、斯くして人々が眞裸體になるならば、その眞裸體が相手方に與へる刺戟は、一時イントゼッセンに値するものがあるであらうが、人々は次第にその刺戟に馴れ、そしてそれ以上にその刺戟を増加させ様もなき眞裸體に對しては、やがて全く無關心となり、彼の湯屋の三助の悲歎をば悲歎とし、彼の婦人性病科醫師の歎息をば歎息とするに至るのである。又他の例を以てするならば、最初一杯のコーヒーは二個の角砂糖にても美味しく飲むことが出来る、然し乍ら第二杯目をも亦その最初一杯と同様の美味さを以て、飲ませようとする時には、二二が四個の角砂糖を入れねばならなくなる、そして第三杯目のそれには、四四、十六個の角砂糖をば入れねば、その最初の美味さをば、づうつと支持することが出来ないのである。けれどもコーヒー茶碗の大きさには、又一定の極限があつて、十六個の角砂糖をば悉く一度に入れることは到底不可能である。だから數杯のコーヒーを重ね飲むならば、人々は遂にはそれを見るのさへも不快を感じるに至るのである。

ここに吾々は流行といふ現象の持つ刺戟内容の一時性と、そしてその絶えざる昂進性とを認

識し、且つその昂進性が一定の極限にやがて到達するといふ極限性をも、その屬性として見なければならぬと思ふ。

x

第二の法則として、私は、「流行の辨證法」をあげ得ると思ふ。一つの流行がその昂進性によつて、その刺戟の強烈さを追ひ行くなれば、必ずやその極限に到達して来る。例へば長きシヨールが流行するならば、次第にその長さは伸長されて行き、遂には頸に一巻きまきつけて、而もその兩端が地面にすれすれとなつて来る、そしてその昂進がその極限に達した時には、人間は他種の刺戟をば求め出して来るものである。ではその他種とは如何なるものであるかといふに、大多數の場合に於いて、辨證法の正に對して反が高調されるが如く、反動的であるのである。長きシヨールはその極限に至つて、反動的に極めて短きものとなり、大なるシヨールはその極限に到達するや、反對に極めて小さきシヨールとなつて来るのを常とするのである。そして前者に於けるモダンの感じは、後者に於けるスマートの感じによつて置換される。又強烈

なる色彩はその次の流行に於いて、清楚淡々たる色彩の流行となつて、モダンにシックによつて跡附けられる様になるのである。

故に吾々が今日の流行より明日の流行を知らんとするならば、先づ今日の流行がその刺戟の昂進に於いて、その極限に到達してゐるかどうかを知る必要がある、そして若しそれが極限に到達してゐないならば、猶流行は、その同一種類の刺戟によつて、その極限に向つて進展することであらう。然るにそれが最早極限に到達してゐるならば、人々はその心をば支配してゐる辨證法的反動の法則に従つて、在來の刺戟のそれと全く正反對なる種類の刺戟を、求め出して來ることを豫知することが出来るのである。

x

第三の法則として、社會學者タルドの「模倣の法則」から分化する流行の法則、即ち「流行は幾何級数的に進展する」といふことをあげねばならない。今、ウイリヤム・マガレットが、男子の裏切りをば憤怒した女が、その斷髮を男子のそれの如く、後頭から刈上げ、パンツをはき、

非常に自堕落な暗黒面的生活を送るといふ脚本を描き、その脚本を「男のやうな女」即ちラ・ガルソンヌと名づけたのであつた。そしてこの脚本はフランス社會の最も頹廢した暗黒面を描寫してフランスの名譽を傷つけたといふ理由で、嘗て世界的文豪として授與されてゐた、レジ・ンドノルの勳章を剝奪された。而もその勳章剝奪事件は、その脚本をば一層有名となし、従つてその女主人公が有名となり、又その刈上げ頭が、ラ・ガルソンヌと呼ばれて流行し出して來たのであつた。

そこで或る一人の奇抜な大膽なる婦人が、實際にそのラ・ガルソンヌを眞似て、その斷髮頭を刈上げたとする、多くの人々は、その奇抜さに失笑するであらうが、世界流行の中心地だと云はれてゐるパリでは、又お天氣者がないではない、「成程、素敵ね、妾もやらう」と刈上げたとする。斯くしてラ・ガルソンヌの頭が甲乙の二人となるや、その次には甲を眞似る丙と、乙を眞似る丁とが現れ、四人となつて來る、そしてこの四人を眞似て又新の四人が出来るからば、八人となり、次には十六人となり、三十二人となり、六十四人より百二十八人となり、二百五十六人にと、次々に倍加されて行くのである。斯くして「あゝあれが最近流行だ」と云はるゝ

までになるや、非常なる加速度を以て進展するものである。だからタルドは、「流行は幾何級数的に進展する」といふのであらう。

それ故に又流行が一旦始められるや、その大衆的暗示によつて、強大にして且つ抵抗し得べくもない、傳染力が生じて來るのである。而もその流行は、文化的レベルの高き方より低き方に流れるのを常としてゐるのであつて、文化的に低級なる方より文化的に高級なる方に流行しゆくといふことは、殆ど例外であり變則であると考へねばならない。例へばジャズにしろ、ハワイ・ダンスにしろ、麻雀にしろ、それが米國に於いて先づ流行の洗禮を受けなかつたならば、世界的流行とはなり得なかつたであらう。そして彼の野球熱の如きは、米國より東洋にかけて熱狂的な流行を來してゐるにも拘らず、米國よりより、舊く且つ高き文明を有してゐると自負してゐる歐洲大陸、殊に英國に於いては、ヤンキー・スポーツとして輕蔑され、その流行を見ざるが如きは、流行移動の方面がその文化の高低によつて、左右され居ることを語るものであらねばならない。そしてこの點に於いて流行は國際的であり、より文化の高き社會に於いて今日流行し居るものは、必ず明日文化のより低き社會の流行となつて來るのである。だから吾々が

日本明日の流行を知らんとするならば、米國社會の今日を見ることが必要であり、米國明日の流行を知らんとするならば、佛蘭西或は英吉利今日の流行を知ることが必要であるのである。

* Tarde, Les Lois de l'imitation, PP. 152—204.

** 第二章「モダンの野蠻主義」三三頁。

x

却説。世界に於ける今日の流行は何であるか？ 私はその風潮をば、四つの言葉を以て現すことが出来ると思ふ。そしてそれは「モダン」であり、「ナンセンス」であり、「エロ」であり、「グロ」である。而もそれ等は、流行刺戟の幾何級数的法則によつて、「ウルトラ」となり、その「尖端的風潮」をば追求してやまないのである。

そして今日の所謂「モダン」は、華麗であり色彩濃厚であることをばその特質としてゐる。恰もそれは變態性慾の露出狂のフロイド式變形であるときへ考へられるまでに、強烈となつてゐるのである。故にその「モダン」が今日に於いて、その「極限」に到達してゐると考へられ

るならば、それはその反對物たる「シック」の流行へと轉化して行くことであらう。そして吾々は既に「シック」の流行を耳にしてゐる、けれども、私は今日の「モダン」は、未だその極限に到達してはゐないと思ふ、そして現代人の心は「シック」の靜寂さよりも、カニバル祭の如く沸騰しいらだてる華かさの氾濫を求めてゐると考へる。

又現代は「ナンセンス」の時代であると云はれてゐる、そしてこの認識の錯覺又は不足に對する、軽い皮膚から感ずる快味は、殊にインテリ階級に對して猶相當の魅力を持續するであらう、然し次の時代に於いてこの弱き刺戟は必ずやより強き刺戟へと進展され、認識の逆倒に對する馬鹿笑と、氣狂騒ぎとが要求されて來るに相違ないと思ふ、だから今日の「ナンセンス」は、明日の「ラフ・マニア」を生むべき先驅者であるに過ぎない。若し又「ナンセンス」が、その反對物へと轉化して行くならば、そこにより含蓄あるもの、又は神祕的なるものが、要求されて來るであらう。そして今迄人生を茶化し來つた人々は、再び人生の嚴肅さに歸ることであらう。

又今日の「エロ」は明日の「テロ」になるであらうし、今日の「グロテスク」は明日の「サタニック」にと變化して行くことであらう。斯くしてそこにテロリズムの研究が起り、サタノロチー（惡魔學）の考究がはじまり、野獸的なる犯罪に興味をそゝり、その變態的犯罪性はより極度に伸長して行くものとならねばならぬと思ふ。

では何が最も深辣なる關心を人間と與ふるやといふに、それは論ずるまでもなく、罪惡であり背徳であらう。そして現代人は今そのより強烈なる刺戟を貪食せんとする過程に於いて、遂にその墓穴へと辿りつきかけてゐる。然し私は茲に詩人ポードレルの如く惡魔を讚美する者ではない、けれども惡魔が最も人心を魅惑するに足る力を持つてゐるといふことは、贊否の如何に關らず明かなる事實であらねばならない。それ故に私は今日の「エロ・グロ」變態時代は、必ず明日の「テロ・サタ」惡魔時代へと流動し行くことであらうと考へる。

見よ!! 世界の大都市に於いて、人類文化の花壇に於いて、日々その慘虐なる犯罪によつて流さるゝ血を!! 洞窟然たる地下室によこたはり居る蒼白せる阿片中毒の裸婦も!! そして又それを垣間見る豚の如く肥滿し、狼の如く變態性に震ひ居る紳士を!! それは慘然たる惡魔の都市であり、野獸の文化に外ならない。故に私は、明日の流行は必ず鉤欄にして、而も陰慘なる

悪魔時代であると云ふことが出来ると思ふ。

* 拙稿「社会問題としての尖端的風潮」(「国民新聞」昭和五年十二月一日)。「尖端の心理学」(「現代癡奇尖端圖鑑」新潮社版、四四頁)。

苦樂の變遷

×
×
12
×
×

X

年齢によつて希望なり欲望なりは變遷して來るものである。だから又その欲望が満足されないと、されるところによつて起る苦しみと樂しみとは、年齢によつて變化して來ねばならない。では一般に、年齢の相異によつて、その希望なり欲望なりがどう變化して行くものであるかといふに、少年時代にあつては、人々はそれが眞理であらうが、眞理でなからうが、唯奇抜であり突飛でありさへするならば、それを愛好しようとする。然るに青年時代になると人々は、奇抜にして而も眞理であることを欲求する、即ち眞理を奇抜の形式に於いて求め且つ表現しようとする努力する。壯年時代に入込むや人々は矢張り眞理を愛好することを忘れない、けれどもその形式に於いて、その表現に於いて平凡を求めて來る。更に人々がその老年時代となるに及んでは、唯平凡そのものを求めて來る、よしそれが不眞理であつても、在來の慣習であり傳統でありさへするならば、彼等は無條件でそれに嗜好をもつものである。)

又少年時代より青年時代にかけては、憧憬の時代であり、空想の時代である、そして青年時

代にかけては、現實を見詰めながら實行に専念する立功の時代であり、又立德の時代である。然るに壯年時代が老年時代によつて置換されるといふと、彼等は過去の立功立德の思ひ出を反芻することによつて生くる、追憶時代の人とならねばならなくなるのである。そしてこの心の變遷は、主としてその肉體の變遷から來るものと考へられる。身體が非常の勢で成長して行く時には、それを促進するが爲の強き刺激が次から次へと必要とされて來る、強き刺激はより突飛であり奇抜である、そして少年時代より青年時代へと伸び行く所の身體には、その強烈なる刺激に適應するだけの弾力性があるからである。

然るに青年時代より壯年時代にかけては、その身體の成長は次第に落着を示して來て、餘りに多くの、餘りに強き刺激をば必要としなくなる、そこに彼等はその刺激に對して選擇の餘裕をば示して來る、斯くして彼等は次第に眞理の有無に着眼して來るのである。けれども人々が壯年時代より老年時代となり來るや、全くその身體の成長をば停止し老衰し脆弱となつて來る、だから彼等は最早強き刺激に堪へ得なくなる、従つて平凡なる、慣習的なる弱き刺激によつて、その生活を推進して行くに過ぎなくなり、その微温的追憶的刺激に好感を抱かざるを得なくな

るのである。

x

それ故に少年時代より青年時代へかけての楽しみは、總て強烈なる刺戟によつて充されるといふことが出来る、そしてその苦しみは何であるかと考へるならば、反對にその強烈なる刺戟から遮断されてあるといふことである。

彼等の或者は破壊を好むであらう、彼等の或者が殘虐を好むであらう、彼等の或者は冒險を好み、競争・競技を好むであらう。又彼等の或者は空想に耽溺する、砂丘に腰を下して、遠く果しなき空想を次から次へと描出することに、若き血の跳躍を感じるであらう。彼等は互にその將來の抱負を語ることに、そのことさへ快感を覚え、大言し壯語することにも、その若き日の逸樂をば感ずることであらう。彼等は又絶大なる至難事と戦ふことに感激を持つ、進んでその艱難に當ることに、苦しみをば超越したる喜びを持つ、殊に青年時代に於いては、彼等は利害の打算を超越して、正義に對する憧れを持つ、邪惡を克服してその正義をば支持すること

に對して狂信的である、だから又彼等は犠牲の誇と歡喜とを知つてゐる。

由來、人類の最大なる楽しみは、正道を踏んで敢て自らを辱めざることである、だから又その反對に最も苦しきことは、確に自らの卑劣に對する自責であらねばならない。

又青年は、自己を信頼すること甚大なる感奮を持つ、一人生意氣に感ず、功名また誰か論ぜん」と、又いふ、「士は己れを知る人の爲に死す」とは、自己を發見し、自己を信頼する人に對して、特に青年の抱く所の感激に外ならない。青年は、自己が社會に認め出されることをば熱望してゐる、だから又青年は自己の表現に努めて來る、彼等は自己の思想を發表することに興味を有してゐるばかりでなく、せめて自己の姓名のみにて世に知らしめんことを焦心する、それ故に若し彼等が社會にその最良なる名を現はすことが出来なければ、よし惡名にもと大それたる事をさへ敢行するのである、だから又社會は、彼等青年よりその希望を失はしめてはならない、その活動を阻止してはならない。青年にとつて失望は致命傷に等しく、活動の阻止は洵に堪へ難き苦痛であるからである。今、彼等をして失望せしめ、その活動を阻止する所の深刻なる失業時代が長く持續され、そして彼等その中に彷徨せしめるならば、その苦痛に中毒

し来る思想體系は、極度に悪化せざるを得ない、そして彼等は總てを呪ひ、總てを否定し、總てを抹殺し破壊することさへ、痛快味を感じ出して來ることであらう。それ故に希望と活動とは青年時代に於ける歡喜の源泉であり、反對に失望と沈滞とは甚大なる苦惱でなければならぬ。

x

青年時代より壯年時代となるにつれて、人々は現實の生活に則して、總てのことを思考し且つ行動して來るのである。彼等は少年時代の如く空想的であるには、餘りに社會的經驗に富んでゐる。だから彼等は又破壊的であるよりも建設的である、革命的であるよりも進歩的である、一步一步現存する條件を利用することによつて、彼等の運命を開拓して行かうとする。而も少年時代より青年時代にかけては、輝かしき將來を豫想してゐたのに反して、壯年時代となるや、將來、即ち老衰時代の不要を豫感して來るのである、そして彼等はその不安にあらかじめ備へ置くの必要を感じ出して來る。又彼等は家庭に對し、その子供に對して責任を感じねばならぬ。

くなる。そこに彼等の殆ど多くのものは、蓄財に専念して來るのである。だから彼等の希望は殆ど總てが經濟的動機から割出され、次第に金を作ることによりも、金を溜めることに逸樂をば感じて來るのである。

又彼等は、彼等の將來に對してそろ／＼見限りをつけ出して來る、そこで彼等は自己の青年時代に抱きしめてゐた希望をば、自己の子供に轉嫁して、その子供の成育とその成功とを懸望し出して來るのである。彼等は事業慾よりも次第にその金利慾を増加し、銀行利子によつてその老後の生活をば保障しようとして來るのである。だから彼等の満足と樂しみとは、利子と子供とに懸つてゐるといふことが出來よう。従つて又彼等の苦しみ、彼等の悲歎は、その希望の幻滅によるものであると考へられる。

老年時代に入るや、人々は安靜そのものを欲求して來る、宗教的靜寂の樂しみは、彼等の脆弱となりし神經組織に必要缺く可からざるものであり、若き日の活動振りをば追憶して、男子は「わしが若い時には」と、その武功を語り、その冒險、その奮闘を慢することに、甚だしき快樂を感じることであらう。又女子は、その美しかりし日に、許多ありし縁談の思ひ出に、ま

ばらに抜け落ちし齒を見せて、莞爾たるものがあるであらう。
要するに今、人がその一生を將に終らんとする時にあたつて、「一生を通じて人としての本務に忠實であつた」といふ確信をば、自らの心に持ち得るならば、凡そ人生に於いてそれに越したる樂しみはなく、その一生を誤り、顧みて自らに愧づることのみであつた」ならば、人生の苦しみは、これに越したるものはなからう。だから吾々はその青年時代より、自己の人生をして、斷じて悔あらしめてはならないと思ふ。

ルンペンの社會學

× × 13 × ×

X

「近代人はジプシーの生活に靈感を感じ、浮浪の生活に魅惑を感じ出して来た、そしてそれは何故であらう？」と考へながら、私はネオンサインが血の様な光を鋪道に流してゐる、歳末の銀座を歩いてゐた。銀座にはこの歳末多忙の際にも拘らず、相も變らず銀ブラ人種が彷徨してゐる。私はその人々と擦違ひさまに、「銀ブラだつて、それは一時的のジプシー生活であり、放浪の生活である、だから又それが近代人の嗜好に投じてゐる譯であらう」と考へさせられた。

X

銀ブラの研究者はいふ、本當の銀ブラ人種は買はない食はない、そして飲まない、たゞ目的もなく毎日の様に漫歩すること、そのことが目的であり、又それ自身が喜悅であると。だが更に今彼等の心の奥底に深く忍び込んで見るならば、そこには羽を伸ばしてゐる幻想の魅惑が潜在してゐる。

彼等はその街角で出會ふエロチックな婦人の瞳の中に、嘗つて或文士が街頭で拾つた戀の話や、ステッキ・ガールの話を閃光的に思ひ出し、そして彼等は、その婦人と數歩の間肩を並べて歩むことに、獨り微笑を心に覺え得ることであらう。又彼等はショー・ウインドウを覗く、そこには英國製の華美なネクタイがある、彼等はそれを胸間にキユウと結んでなど考へては見るものゝ、たゞその幻想を享樂するのみで、すぐ又彼等の目は、隣の陳列棚に轉ぜられてゐる、そしてそこには極彩色の支那料理の羅列がある、だが彼等はその支那料理の色彩によつて、上海杏花樓の味覺をば瞬時の間反芻して見るまでである。

X

斯くして彼等は、近代的刺戟のパラエティを、幻想的に享樂することによつて自己を麻着して歩く、最後に彼等は疲れたる足を不二家に、或は資生堂に休めて、現實的には僅一杯の珈琲によつて、銀ブラ欲望の總てを、曲りなりにも清算して了ふ、そして彼等は靜かに、銀ブラ人の常徑が、松屋・松坂屋の側ではなくつて、資生堂・不二家の側であることや、美しいモダンの

婦人の通行率が、その右側と左側とで三對七の比率を示してゐることや、その時間に於いて、それは薄暮の一二時間であることや、又その足が運ばれて行く道筋に關する、現考學的な結論を割出さうとするのである。そしてそれは確に一時的ながらもルンペンの氣分を氣分としてゐる者である。

x

私は又それに就いて次の如き左證を呼出すことが出来る。

みぞれに近い雨がばらばらと降つてゐた十二月末の真夜中である、東京市社會局の浮浪人調査の時に、私は淺草傳法院の墓と墓との間を通つて、炭俵を踏んだ、「痛た、痛い」とその炭俵の起上つたのには、小膽な私は度膽をぬかれざるを得ない、「何だ!!」と私は叫んだ、「ハイ、旦那すみません」と炭俵から頭と足とを出した男が、私を刑事と思ひ違ひをして恐縮する。

男は信州から一族揚げるべく東京に出て來た、そして彼は例によつて失業した。今、彼は活動寫眞館の行燈をかついでピラを撒いてゐる。「ハイ、一館の行燈だけでは飯もろくに食へませ

るので、旦那の前ですが、富士館のやつをかついで出て、家と家との間に隠し、又キネマ俱樂部のやつをかつぎに行きます、そして代り代りにかつき廻つて居るんですが、それでも木賃が餘りませんので……」で、國に歸つたら、國では何をしておたね」「ハイ、國ですすか?

石切りをしてゐました、國へ一度歸りましたが、どうも田舎の女はすゝけて居りますので……」私は噴出した、「君、田舎の女がすゝけてゐて、都會の女が美しいとした所で、墓場でオカンをしてゐる君には、何等關係がなからう?」「でも旦那、東京の女が白く化粧をして、よい匂をさせて……その女にかうやつてピラを手渡しするのでさへ、都會に生きてゐる甲斐があります」と汚い手を私に差出して、美しい女との幻想を追ふが如くニッコとした。彼もまた幻想の享樂に生きてゐるものであらう。

だから私は思ふ、放浪生活のもつてゐる第一の魅力は、刺戟のパラエティを、次々に——よしそれが幻想的であつたとしても——享樂し得ることであると。

x

更に又吾々が潜在意識にまでその穿鑿を掘り下げて行くならば、そこに青草の氾濫してゐる茫漠たる野原を、彷徨して行く遊牧人の姿をば見出すことであらう。そして現代人の放浪生活に對する憧憬は、實にその遊牧人心理に對する憧憬であり、又その隔世遺傳であると云ふことに氣付くであらう。

放浪の生活それは淋しくもあり悲壯でもある。スペインサーが遊牧人の生活を評して、彼等は政治的には征服者であり、歴史的には争闘者であり、経済的には牧畜者である。そして彼等は止まつては國民となり、動いては軍隊となるものであると云つてゐるが如く、大草原をよぎり行く先の生活には大なる不安があり、冒險があり、又躍る好奇と喜悅とがある。而もその心理は、パウラ・ロンブローゾ嬢の論證してゐるが様に、現代人の心の片隅に明確には意識されずに、飛躍し得る機会をば狙つてゐるものである。

やがて新年がやつて来る。そして吾々は又街頭に一時的ルンペンの幾多の者を目撃することであらう。人々はそれを「酔漢」と呼ぶ。アルコールの麻醉によつて、意志の力が弱められて来るや、今迄心の片隅に壓搾されてゐた遊牧人の心理が、猛然とその頭をもたげて来る。だから

ら彼等は必ず酔歩よろしくあつて、一時的ながらも放浪生活を始め出すにはゐない。だから近代人の抱くルンペン嗜好には、その第二の動因を、潜在意識の中にあつて、従つて無意識的ではありながらも、大なる教唆力をもつてゐる、遊牧人種の隔世遺傳的心理であると考へねばならない。

x

古代の遊牧群の間には、土地私有の觀念は未だ發達してゐなかつた。彼等にとつては土地は共有であり、否、「有」と云ふ觀念さへも、その心に發生してゐなかつたと考へられる。然るに人類が農耕を始め、その土地に加工し出して来るや、土地私有の觀念が生じ、その私有觀念によつて人類は土地に定住せしめられ、遂には農奴の如く土地の附屬物として、考へられるに至つたのであつた。斯くして發達し來りたる私有財産制度は、人間の住居をその私産を中心とする一定範囲内に極限して、その放浪性の自由を極度に束縛するものとなつて來たのであつた。自由なき農夫は、しばしの間手を鉄において、一片の孤雲が自由に南へ南へと流れ行くのを

飽かず眺めることであらう。サラリーマンは、窓より青空に飛び行くストーブの煤煙にさへ、懐しみを感じて目送ることであらう。地主は、氣輕さうに旅より旅へと、漂泊の生活を追ふて行くジプシーの一隊を見ては、「旅」の思ひに耽ることであらう。

* 野蠻未開人の日常の活動の範圍は、二哩半の半徑をもつ圓周内に極限されるのを常としてゐた。

x

定着の生活は、人と人との相互影響關係を益々複雑にし、其繫縛の力を大にして來るものである。例へば田舎は都會に比してより定着的である、だから其記憶性の強大と相俟つて、よりその繫縛力を強大ならしめてゐる。若し諸君がその妻を娶らんとして、その婦人の出生地たる田舎に行き、村外れの茶屋に一杯の茶を求めて、その婦人の事を尋ねるならば、記憶的なる田舎人は、其婦人の親より祖父に、祖父より祖先代々數百年の先々にまで、遡つて語り出すのみならず、その傍系の末々に至るまで、偉大なる歴史家の如く語つて、倦むことを知らぬのに驚愕することであらう。

そして都會に於いても、その繫縛性は決して皆無ではない。だから現代人は、この過去の煩雜さから、又同輩との連帶關係からの逃亡を、マルコポーロの如く求めてゐる。それ故に私は、この反動性に、放浪への第三動因を見ることが出来ると思ふ。

x

私の友人にKといふ男がある、彼は喧嘩早きことを以て有名である。或日彼が私に云つた、「私はよく喧嘩をして、折角ありついた職を屢々捨てゝ了つた、だが明日からどうして食ふか、といふ不安に襲はれながらも職を捨てる、その時の悲壯な英雄の様な感じが好きでならない、だからついやつてしまふ、然し昨今の様にかう長く失業して、食ふや食はずの日は、實際に長く續くと、から切り元氣がなくなり、もうなる様になるさとあきらめて了ふ」と、成程それは悲壯であらう。

曾て華族の御曹子が、日比谷原頭で草を刈り、そしてそれは労働者の體験をなすが爲である、と新聞紙が書きたてた時に、本當の労働者が私に「なに労働することは労働者にとつては左程

に苦痛ではない、たゞ明日の仕事が保障されてゐないといふ不安が、最も甚大な苦痛である」と云つたことがあつた。經濟學者のチードを俟つまでもなく、「力作は必ずしも人の苦痛とする所ではない」強制されてゐない、氣儘勝手の労働は却つて時に愉快を伴ふものであるからである。然し失業の不安は、實に生命の不安である、生命の不安を賭するといふことは、Kならずとも悲壯の感に撃たれざるを得まい。そしてその悲壯をば敢てなしてゐるルンペンの生活は、それをなし得ずして、たゞ首の爲に幾度か自負心を蹂躪し、幾度か自らを情無きものと憤懣する人々にとつては、洵に美望に値する勇士の生活ではあるまいか？ 私はその勇士に對する人の憧れを、又ルンペン禮讃の第四動因に、數へ上げんとするものである。

X

では實際にルンペンの生活そのもの、又はジプシーの生活そのものは、その體験に於いても人々を盪感せしむるに足る愉快なものがあるであらうか？ 私は深き疑感をそこにさしはさまざるを得ない。

永遠の放浪民族として人も許し自らも許してゐたジプシーは、最近勞農ロシヤの民族政策の一つとして、オデッサ管内に於いて定住農民となる爲に、それぞれ農地を下附され、彼等は又喜んでその農地の分配を受け、耕作に従事するに至つたのであつた。又吾々は、西班牙のグラナダ市に於けるジプシーの定住生活を考へて見るならば、國土を持たぬユダヤ人がシオニズムの運動によつて、昔の國土を買収せんとしてゐるが如く、ジプシーも亦、その社會的條件、殊にその經濟的條件が具備されて來るならば、その放浪生活より喜んで次第にその足を洗ふことであらうと思ふ。

由來、ジプシーの放浪生活は、その生業の關係から餘儀なくされて來た、そして彼等の放浪生活は、やがて又その思想を自由主義にとはぐみ、進んではX X X X Xの主義にと導き來つたものであらう。放浪者の多くが自由思想を抱き、地理學者の多くがX X X X X主義を、例へばルソー、サン・シモン、ブルードン、マルクス、バクーニン、ルクリエー及びクロボトキンの如く抱き來つたが様に、ジプシーの思想は、その生活様式より結果されたものであつて、その思想よりなされてゐる生活ではないと思ふ。

X

近時、殊に失業問題の深刻化するにつれて、大都市に蟄集し化成されて来るルンペン層は、その數の甚だしく急激に増大し、又その生活の様式より結果される、X X X主義的思想傾向をば大となして來たのであつた。従來のルンペンは全く頽廢的であり、多くは自墮落の結果であり、彼等の中より嘗つて重大なる犯罪人を出したことはなかつた。然るに近時のそれは多く働き盛りなる青年或は壯年であり、その生活様式の永續は、遂に犬儒哲學の巨頭たるデオゲネスが、「犬の如く彷徨ひ、犬の如く満足してゐる」といふ生活の中にあつても、アレキサンダー大帝の權威を無視したるが如き、X X X思想を生み來るの社會的危險を、ルンペン嗜好の流行と共に、我々は深感して置かねばならない。

* 摘著「社會學入門」二八九頁。

** 摘稿「ルンペン論」(「新潮」昭和六年五月號二〇頁)。

擬似ルンペンの發生學

X X 14 X X

X

現代は第二産業革命の時代である。水車文明より蒸気文明への轉換期に於いて、吾々は第一産業革命を見る、そしてトインビーがその著「産業革命史」に於いて、「若しこのプロレタリアの慘状をば、彼のワットが瞥見したりしならば、彼はその發明をば斷念したでもあらう」と述べてゐるが如く、近世のプロレタリア階級は、實にその蒸気文明の重壓を手段として、押下げられたる階級に外ならない。然るに蒸気文明は電気文明にその王座を譲り、電気文明は又次第にその新なる一層超壓搾力を有する重壓によつて、更にプロレタリア階級を分解せしめ、それよりルンペン階級をば分化せしめるに役立つて來た。そして私は、この蒸気機關による産業より電動機による産業へと、即ち石炭による産業より白炭による渦輪産業へと、その生産手段が變轉し、又その生産量が甚だしく激増せしめられて來た現象を目して、第二産業革命と云はんとする者である。

今、生産手段によつて、文明の時代を劃するならば、それを道具の時代・機械の時代・機關

の時代とすることが出來よう。そして道具はそれ自個では活動し得ないから、生産する爲には人がそれをば驅使せねばならない。然るに機械は半自動的であるから、人は機械と共働することによつてその生産をなし、進んで又それが機關の時代となるや、道具の時代とは全く反對に自動的なるその機能によつて、人は寧ろ機關のために驅使せられ、監督せられ、拍車づけられて來た。だからその生産關係に於いては、人は却つてその機關に従屬するものとなり、そしてこの機關の顯著なる進歩、即ち自動性の著しき進展は、次第に疲勞しやすく、不規則であり、又時に反逆し、罷業することによつて、巨費を投資したる機關の能率をば、削減するの不安を絶えず胚胎する所の労働者を忌避して、益々電化による自動性を助長し、遂には若しその殆ど總ての機制が、近代人の寵兒たるロボットによつて代行さるゝ時代に近づき、且つそのスピードが層一層アップされ行くならば、現代のプロレタリアートは、又次第にその社會的經濟的地位を喪失して、永久の失業者とならざるを得ない。

然るに失業者は購買力を持たない、購買力の減少は、生産スピードのアップと相俟つて、産業の合理化或は整理を強制し、産業の合理化は再びプロレタリアートを分解して、失業群の積

出を強制して来る。それ故に現代の社會制度が支持せられ、そしてその労働時間制に於いて、今より六十六年以前に主張されたる八時間労働制が、今日猶實施されずにある間、否、それは六時間制となり、四時間制となり、三十分制となり、隔日三十分労働制となつて、その電気文明の配當をば、生産手段を所有して居るブルジョア階級にのみ獨占せしめずして、プロレタリアートにも分配するのでなければ、永久的なる失業群の分化は、現代の資本主義社會に於いて、必然避くべからざるの趨勢でなければならぬ。

x

斯くして電気文明・ロボット文明は、その鐵と電流とによつて、骨と血とのプロレタリアートを分解し、その一部分を社會的労働の範圍から分離し、即ち生産過程から押除けることによつて、生産に於いて役割を演ずる他の人々に對して、何等役割を演ぜざる階級と化成して來るのである。然しながら、吾々はこの新なる階級を目して直にルンペン階級なりとは考へ得ない、何故ならば、吾々がルンペンと呼ぶ所のものは、寧ろ多く物質的存在條件の相違よりも、それに

よつて特性づけられる階級の意識全體、即ち觀念形態及び階級心理に、より多く關係する概念であるからである。

生産過程から押除けられたばかりの、即ち失業せしめられたばかりの人々は、必ずや當分の經濟上の舊地位をば再獲得する爲に焦心するであらう。そして彼等はその失業苦、即ち労働せんとして労働し得ざる社會制度の缺陷に對して不平を抱き、労働權の確立を要求し、進んでその制度を變革しようと考へ或は策動するであらう。だから彼等は未だその階級心理に於いて明かにプロレタリア階級に屬してゐる者と云はなければならぬ。そして私は、このプロレタリア階級よりルンペン階級へと轉落して行く過程にある——その社會的地位に於いてはルンペンであり、その觀念形態に於いては未だプロレタリアである——人々をば、一つの過渡階級をなす者なりと考へ、それを擬似ルンペン階級、或はルンペン・プロレタリアートと呼ぼんとするものである。

この擬似ルンペン生活の永續は、先づ彼等をその榮養量に於いて脅威せざるを得ない。そして榮養量の不足は次第にその肉體力を凋落せしめ、たゞ生きてゐるといふまでとなり、息をし

てゐるまでとなつて来る。この肉體力の没落は、必然彼等の精神力、殊にその意志の力を没落せしめ、肉體的にも精神的にも「無爲」を、その生活の基調として来るのである。彼等は常に空腹であるが、それ以上に空腹になることを恐れてゐる。「腹がへるから、寝てゐよう」とは彼等のモットであり、合言葉である。嘗てルンペン哲學の巨頭たるデオゲネスが、犬を理想としてゐるが如く、彼等の欲望は、その欲望を起すエナジーの缺乏によつて次第に極小となり、極小になるにつれて、益々その生活に満足を感じ得るに至るのである。そしてそれは恰も諦めの生活であり、悟りの生活であるかの如き形態をば呈して来るほど、全く彼等は頽廢的となり、犯罪學者が吾々に左證してゐるが如く、彼等の中より未だ會て重罪犯人を出したことがなかつた程無氣力である。この無氣力と満足性とを吾々は、ルンペン階級の心理的特性として考へなければならぬ。けれども一見しては彼等の生活形態は、禁慾主義より結果された自主的悟りの生活に類似してゐて、若し人々がその經驗内容を持たずして、その生活の外観にのみ囚はれる時にはそれは幾多の點に於いて、近代人の心を魅惑し得るものを有してゐるのである。

近代人はその放浪の生活によつて、心の奥底に潜在してゐる、遊牧人生活への憧憬を反芻し、

青草の柔かき肌ざはりを幻想するであらうし、又現代社會が有する重複せる繁雜性、ホプハウスの一人は生れながらにして繋がれてゐる、そしてそれから自由にならうとしてゐる」と云つてゐるが如く、その繁雜性と煩雜性とから逃避しようとしてゐる。而もしようとしてない得ないである、この阻まれたる熱望をば、ルンペンの生活に投影して、そこに靈感を發見するのであらう。争闘又争闘の現代に於いて、ルンペンの生活は、その争闘性を超えて餘りに平和ではないか？ 不平又不平の現代に於いて、ルンペンの生活は、よし餘儀なくせしめられたものによせよ、春光の如き満足さを持つてゐるではないか？ 屈辱又屈辱の現代生活からかけ離れて、ルンペンの生活は、空の如く空虚であり、風の如く自由ではないか？ 榮譽に焦心する現代人に比して、彼等は水の如く虚心坦懐ではないか？ 少くとも彼はある様に見え、第三者からは考へられる。争闘、不平、屈辱、榮譽の爲に、即ちデュルケームの所謂社會的制壓の爲に心疲れたる近代人にとつて、自然と自由と平和とを満喫してゐるが如く見えるルンペンの生活が、辨證法的に美望されるに値し、そこに又近代人のルンペン嗜好と、進んでは禮讃とを生むのであらう。

X

けれども吾々が今日最も關心を持ち居るものは、この嗜好の對象となる、眞の、即ち舊來の意味に於けるルンペン階級ではなくつて、苦悶し、煩悶し、怨嗟し、咆哮し、叫喚しながら、プロレタリア階級からルンペン階級へと轉落し行く、過渡階級たる擬似ルンペン階級であり、その轉落し行く過程でなければならぬ。プロレタリア階級のイデオロギーが、社會主義的X主義者であるのに、彼等ルンペン・プロレタリアートのそれは、XX主義的となり、ブランクイ主義となり、極度に自暴自棄的となり、犯罪的となつて来る。そして前者のイデオロギーが崩壊して、後者のイデオロギーが形成され行く過程と、その生活が不安化され行く過程との相關々係に、深き考察がなされねばならない。若し自主的中産階級より、ブルジョアジーの重壓によつて、プロレタリアートが化成され行く過程の考察と表現とに、プロレタリア科學があり、プロレタリア文學があるならば、このルンペン・プロレタリアートの化成と、それが再び次第に眞のルンペン階級へと轉落し行き、そこに安定する過程とを對象として、又ルンペン科

學とルンペン文學とが構成されねばならない。

彼等は久しく失業してゐた、雨は甚だしいが仕事が出た。甲はかみつくが如く仕事に出て行くが、乙は、「こんな雨降に仕事に行く位なら、家を引繰返して、金魚でも飼へ」と空腹を抱いて寢て動かない。甲はルンペン・プロレタリアとして、は有産者であつた、着替の法被を一枚持つてゐるが、乙は着のみ着のまゝである、彼は雨に濡れることを恐れてゐる、そして着替の法被を一枚、彼より多く所有してゐる甲に對して、「濡れることをそんなに好むなら、家を引繰返して、金魚と同居でもしろ」と軽い反情と、ルンペンとしての無爲の誇りを持ちかけてゐる。この甲より乙へとルンペン階級の觀念形態を深めて行くに、一枚の法被の有無が、如何にその階級心理的楨杆を左右するに役立つてゐるかを、吾々は決して等閑視してはならないと思ふ。

笑の哲學

×
×
15
×
×

x

「笑」を考へると、私はすぐ夏目漱石さんが、自分の笑顔に就いて憤慨された話を思ひ出す。當時「ニコく」といふ雑誌があつた、記者が漱石さんの所へやつて来て、「先生、一つニコニコした寫眞を一枚撮らして頂きたいものですが」と頼み込んだ、然し漱石さんは、「可笑しくなゝいものを笑へるものか」とはねつけられた。すると記者は、「では普通の寫眞でも結構ですから、どうぞ」と譲歩した、「普通の寫眞なら」と漱石さんがカメラの前に立たれると、すかさず記者は、「先生、ほんの一寸で宜しう御座いますから、一つ笑つて頂けませんでせうか？」といふ、大抵の者ならニコリする、そこを記者はカチリとやる積りであつたのに、漱石さんは、不氣味な顔をして、「では約束が違ふからやめよう」と庭から書齋にあられようとした、記者は周章で、「先生、ではどうぞ、本當に普通の宜しう御座いますから」と泣かんばかりにして寫眞を取つて歸つた。

半ヶ月程たつて、漱石さんの所へ雑誌「ニコく」が郵送されて来た、開いて見ると、これはどうだ、自分の寫眞はいつの間にか、完全にニコく顔をしてゐるぢやないか、漱石さんは、修正されて機械的に笑はされてゐる自分の寫眞をながめて、ベテンに掛けたその記者のやり方を、極度に憤慨されたさうであつた。

x

そして笑つた漱石さんには、確に憤慨があつた、然し漱石さんの憤慨には、却つて記者の笑があつたであらう。「態ア見ろ、さんさばら威張りやがつて、これでも笑はないと云ふのか、今頃はさぞ先生驚いたり、怒つたりしてゐるだらう」と思ふ記者の顔には、笑が一時這ひ廻つたに違ひない。だから私は、笑は慨して笑を生まない、他人の愚と悲愴とが、却つて常に多くの笑を生んでゐると思ふ。

道化役者は笑はない、笑つても本心から笑つてはならない、いや、彼等の多くは寧ろ擲られねばならない、そして彼等が擲られれば擲られる程、そのボカくといふ音の二乗に正比例して観衆が笑ひこけて来る。落語家もその嘲を落す時に、自分で自分の落しに笑つてはならない、

うっかり噴出してもしやうなら、お客から「何が可笑しいのか馬鹿野郎!!」と激怒を買ひ、百パーセントの人氣を失ふて了ふであらう。

諸君は、蕎麥屋の出前持が、自轉車からころげ落ちたのに、一片の同情を感ずることよりも、先に饅頭蕎麥の流れこけるのに、笑を吹掛けるであらうし、紳士が帽子を飛ばし、淑女がその傘を風に取り居るのを見ては、哄笑を味ひ得るであらう。然るに吾々は、げらく大笑する男に、却つて反感を抱き、よしそれにつれて笑ふとしても、たゞ笑ふその男の馬鹿らしさに噴出すに過ぎない、そしてそこには笑と悲との辨證法があるからであらう。

x

笑の辨證法的轉化に就いて、私は、世界的名畫として、巴里のルーヴル博物館が詩示珍藏してゐる、ダヴィンチ不朽の傑作モナ・リザを思ひ出すことが出来る。今、私がルーヴルの畫廊を訪ねて、灰白色の壁の上に、神祕な永遠の謎の如き微笑を浮べて、じつと靜視してゐる彼女を見る時に、私の心は次第に底知れぬ神祕の想ひに沈んで行くのである。何たるそれは魅惑に

充てる謎であるか？ 私はそれをいつまでも飽かず眺めることが出来るし、又幾度も幾度もその同じ畫廊を訪ね行かねばならなかつた。そしてその微笑は、永遠に人々の沈黙と思索とを、寧ろ近世彫刻界の巨匠ロダンの「考へる人」よりも、より深刻に呼んで來ることであらう、が決して私は、かれから笑が暗示されようとは思ひはしない。

然るに時としては、ベイレーのいふが如く、他人の涙が自分の笑となつて來る、殊に變態性の人々に於いては然りであり、群衆心理に於いても亦然りである。彼等は自ら他人を苦しめ、その悲鳴によつて自らの笑を製造する、だから私は、笑は自己本位的であり、何時も主觀的であり、利己的立脚地に立つて發せられてゐるものであると思ふ。

x

相馬御風氏によつて近時有名につて來た大愚良寛は、草書の大家として知られてゐた。A村の庄屋は、彼に一幅の掛物を書かせんものとたくらんだ。托鉢に良寛がやつて來ることに、庄屋のKは一飯を良寛に布施して、「良寛さま、一幅掛物を書いてくらしやいや」と頼む、良寛は、

「今日は気分が悪いすけ、墨をすつて置かしやい。今度書くすけ」といふ。その次に良寛がA村にやつて来た時に、Kが、「良寛さま、墨すつて置いたすけ、書いてくらしやいや」と云ふと、良寛は、又「今日は気分が進まんすけ、墨すつて置かしやい、今度来た時に書くすけに」といふ。幾度か幾度か一飯がふるまはれ、墨がすられた、けれども良寛の気分といふ奴はいつも悪かつた。

Kは、「よし糞坊主、今度といふ今度は威しても書かしてやるぞ」と墨をすつてゐると、良寛が飄然として托鉢にやつて来た、Kが、「良寛さま……」といふと、良寛は、「今日は気分が悪いすけに……」といつもの様にいひ出す、Kはすつくり立上つて、「この糞坊主奴、いつまで墨を無駄にすらせる積りか、かうして呉れる」と作男を手傳はして、良寛を薪二階に上げて櫛子を引き、書かぬ中は降ろさぬと脅した。良寛は泣かんばかりに「書くすけに」と詫びた、二階から降りて良寛は、のべられた紙へすらくと書いた、そして「これでよいかえ」といふ、Kは先程の無禮を陳謝しようとしたが、良寛は逃げるが様にしてA村を去つて、而も彼は死ぬまで決してその村に足を向けなかつたと云はれてゐる。庄屋は餘りに達筆なその字が讀めなかつた。

た、彼は自慢にそれを床間にかけてゐたが、それには、「おきやれおきやれその手は食はぬわしも手もある足もある」と書きながら辱されてゐた。だから庄屋の得意の嘲笑が、愚の悲慘へと逆轉する、そこに良寛の晴れやかな嘲笑が生れて来るのである。

x

今、或男の顔をしげく見ながら笑ふならば、彼は決して私の笑につれて笑ひはしない。彼は時によると、「君、俺の鼻は倒まについてゐるのかね」と眞面目になつて逆襲するか、「眞面目くもない、よしやがれ!! ヒョットコ野郎」と激昂するであらう。だが若しそれが若き婦人であるならば、自分の顔に墨でもついてゐやせぬか知らと、顔をあからめながら、コンパクトを開きその鏡を見ることであらう。だから「笑」は時に激昂を買ひ、時に又羞恥を投擲するに役立つものである。然し考へて見るならば、笑にも幾多の種類がある、今迄私が述べ來つたものは、その中で嘲笑の部類に属するものであり、そして嘲笑は、嘲笑・冷笑・輕笑・目笑と、一つのグループの中に分類さるべきである。誰しも多少に拘らず自惚れを持ち、インテリーの自尊心

を持つてゐる、それ故に人間はいつもその片類に、冷笑をば浮べ居ることの出来る動物である。或動物學者の説によると、人間が他の動物と異なる唯一の特長は、笑ふことである、人間は笑ふ、けれども他の動物は決して笑はないさうである。成程笑ふといふことは、複雑な發達した心理現象であり、而もその種類の雑多とその等級の多様とに思ひ及ぶならば、吾々は驚かねばならぬ。

x

私の關心を惹いてゐる笑に、「進化せる目笑」がある、單なる目笑は、目と目とを見あはせて笑ふそれであり、そしてこの目笑は人を嘲りしる場合に用ゐられてゐた。けれどもそれは次第に嬌笑と目語との合成され純化された、ウインクにまで進化して來たのであつた。ウインク、それは秋波の微笑である。「相近づく二つの笑は、一つの接吻に終る」と云はれてゐるが如く、「此方から笑を以て彼女に近づいた時に、先方でも笑を浮べる様なことがあつたなら、それは間違ひなく成功する」と軟派の不良が斷言してゐるが様に、それは甚だしくエロテックでも

あり、且つ危険性をも帯びてゐる。

又私はこゝに苦笑を考へ、強笑を考へる。苦笑は他人の嘲笑に對する一種の反撃である、彼はバニーから美しき女給の嬌笑に送られ、微睡を帯びて街路に出た、彼には世間の奴等は皆馬鹿者に見え、薄野呂に考へられた、彼は浩然として其ステッキを一振りふつた、そのとたんである、彼は舗道の上のバナナの皮の上にいやといふ程尻餅をついてゐた。街頭の人々は一度に笑の交響樂を彼の爲に奏し、中には無遠慮に哄笑を續けてゐる奴もある。彼は一寸今出て來たバニーを顧みた、美しき女給は半ば開いた扉の間から、腹を叩いて笑つてゐるではないか、彼は泣きたかつた、月賦拂ひのズボンは毫無しになつてゐる、人がゐなかつたら彼はきつと泣いた、けれども彼は泣かない、そして彼は苦笑する、いや強ひて豪傑笑をする、「ズボンなら五つもあら」と空威張りする積りで、然しその強笑は、悲しさと痛さとにへし曲げられて、平行四邊形の苦笑となつて來るのである。

x

笑を又その等級によつて陳列するならば、それは、苦笑・微笑・哄笑・大笑・抱腹絶倒となつて来るであらう。苦笑・微笑は愉快である、けれども抱腹絶倒に至つては寧ろ苦痛を感じざるを得ない。

涙は抑へることが出来るが、笑を抑へることは至難である。然し人間の心理が發達するにつれて、その笑をより穩かなる笑に、押下げる事が出来るやうである。今、文明人と野蠻人とを比較するならば、文明人は馬鹿の大笑をやらないが、野蠻人・未開人はよく笑ひこける、餘りに笑つて遂には絶命する者さへあると云はれてゐる。又これを子供と大人とに就いて比較考察するならば、子供は大人より屢々大笑する、そして大人は反對に子供より度々微笑する。知識階級に屬する人々と無教育の人々とを對比するならば、矢張り知識階級の人々は無教育の人々に比して餘り大笑しない、けれども彼等はしばしば心に於いて笑ふ。然るに無教育者にとつては、その可笑味が、認識されずに通り過されて了ふ幾多の現象がある、でも一度その可笑味を發見するや、彼等は止度なく笑ひこけて来る、そこに所謂「三十里の差」が介在するからであらう。だから全くその智の發達してゐない人々には、その認識の不足から笑の量は決して多

くはない、然しその智が次第に進むにつれて、笑の量は増加されて来る、けれども亦その智がより進むに於いては、笑ふべき何物をも持たなくなつて来るのである。

だからゲーテはいふ、「半解の男は笑ふ、然し全智の男は笑はない」と、又彼は、「吾々の眞實の笑は、なにかしらの苦しみを以て滿載されてゐる」と歌つてゐる。賢明なる心は、どんな場合にでも、世界に於ける可笑しき現象のその下に、横はり居る悲哀の陰鬱なる認識をば持つであらうからである。

x

例へば、道化役者が殴られる、彼は馴れた顔をする、すると観客は笑ふ、彼は押倒され、ノックアウトされる、大向はどつと哄笑の津浪を寄せる、彼は蹴飛ばされ、張倒されてよろ／＼となる、観衆は抱腹絶倒の濺渦を巻く、然しその濺渦の中にあつても賢明なる心は笑はない、賢明なる心は、道化役者の生活を知り抜いてゐるからである、そこには笑ふべき何物もない、彼の家には病妻があつた、飢ゑてゐる四人の子供があつた、而も世は失業の世界である、彼は

男子としての面目を泥土の中に投擲しても、その妻子を養はねばならなかつた。斯くして彼は、不景氣によつて奪はれたる笑を、何とかして奪還しようとする人々が焦つてゐるのに乗じて、「殿られる奴」になるべく決心した、そこに深刻な陰惨な生活の苦悶があるのみであつて、何等可笑に値すべきものはない。又賢明なる心は、バナナの皮の滑ることをも知つてゐる、そして滑るならば、人間は重心を失ふ、重心を失ふならば、倒れることも亦知つてゐる。一人の男が今倒れるならば、そこにニュートンの重力の法則を思ひ出すのみで、街頭人の如く笑ふ何物をも見しないであらう。

x

然しながらインテリにも笑の欲望はある、彼等が理智の陰森たる境地にあればある程、反對に晴れやかなる笑が笑ひたくなる筈である。そこで彼等は、精神作用の發達によつて失はれてしまつた笑を、故意に製造することによつて、自己のその欲望をば瞞着し、生活をば享樂しようとして試みて來るのである。そして私はこの種の笑として、ナンセンスの持つ笑と、滑稽・洒落

又はユーモアの持つ笑とを考へることが出来る、そしてそれはトリックの笑である。

ナンセンスの笑は、認識の進める者が、認識不足の者に對して感ずる笑である。言葉を換へて云ふならば、推理確認の費用が節約される所から生ずる笑である。人間の心は先走り勝ちなものであり、殊に認識の完全な、智慮のある人々の心は、一を聞いて十を悟らうとする。將校「氣をつけと云ふのに何故そんなにキヨロ／＼してゐるか」すると人々は新兵が何と答へるだらう、頭をかかか、顔を赤らめるかするであらう。そこで將校は「馬鹿!! 以後氣をつけろ」と怒鳴りつけるであらう、と先走つて推理する。所が新兵は、「ハイ、だから四方に眼を配つて氣をつけてゐるのであります」と平然としていふ。そこに先走つてゐた推理から吾々の心は逆戻りをして、尻餅をつかねばならない、そして豫めなした推理を確認しよう、その徑路に向つて配置されてゐたエネルギーのやり所を失つて來る、だが出されかけられたるエネルギーは止め得べくもない、そしてそれは、即ち推理確認の費用の節約によつて餘剩されたるエネルギーは、「笑」となつて發散されて來るのである、と考へられる。

又フロイドをして説明せしむるならば、滑稽の笑は、觀念の費用が節約されて生じ、洒落の笑は制止の費用が節約されるからであり、ユーモアのそれは、感情の費用が節約される所から發生するものである、といふのである。

又彼は滑稽は子供に歸ることである、人眞似は滑稽であるが、それは子供の時代によくやることである。漫畫は滑稽である、そしてそれは子供の畫の如く印象的であり、子供は固有の尺度を持つてゐない所から、誇張的になり、その平衡を無視してゐるのに、似てゐるからである、と論じてゐる。成程吾々はチャプリンの歩みつきに滑稽味を感じる、それはその歩みの型を通して、吾々がよち／＼と歩き始めた時の聯想を暗に呼び起すからであらう。又フロイドをして云はしめたならば、それは多分子子供の時代に、玩具の人影がふらつかせた足つきである、そしてそれによつて子供の時代に感じた快感を反芻するのである、といふであらうし、ベルグソンに云はせたなら、後に説明するが如く、それは「生活の器械化」からであるといふであらう。

x

兎に角、滑稽の本態は、前意識的の「子供らしさ」に結びついてゐるらしい、だから滑稽は、「失はれた子供の笑」を再び得ることである。そしてこの子供らしさは、吾々が常に觀念し、期待するであらう所のものと、その配置の費用に於いて開きをもつてゐる、「私ばかりやる」然るに「彼は私のやると違つて子供の如くやつた」「私は子供の様に轉ばない」然るに「彼は子供の如く轉んだ」そこに私が觀念する所の費用に餘剰がある。だが心にとつては斷念といふことはむづかしい、だから餘剰したそのエネルギーは、笑となつて放出されねばならない、そしてそこに滑稽の笑がある、とフロイドは考へるのである。

又洒落は、それによつて概念や思考の結合をおこさせる、そしてそれを洒落によらずして起すとするれば、思考するに際して心の内部に於いて、大なる障礙に對抗し努力を拂はねばならない、即ち少くともその制止や、壓迫排除等の強さに相當する精神上の支出を賭けねばならない。然るに洒落はその賭けねばならぬ費用を節約して呉れる、だから吾々はその制止に向けて

め配置する所のエネルギーが不必要となつて來ると、そのエネルギーが聴覺による認識の系路をば溢れ出し、「笑」となつて搬出され發散されて來るのであると考へられる。

x

ユーモアの持つ笑は、又同様に費用の節約によるものであるが、それは同情、不満、苦痛、感動等の感情の爲にするエネルギーの費用が、節約されることに起因するものである。例へば一人の盜賊があつて、今彼は絞首臺に曳かれて行く、人々は彼が絶望の餘り自暴自棄に陥るであらう、そしてそれは人間として尤もなことであり、矢張り多少に拘らず同情をば彼に感じようとしてゐる。だのにその盜賊は、自分の首が二三分の間に絞められるといふ瀬戸際に、「風邪をひくといけない、一つ首巻を貸して呉れ」とでも云つたとしたならば、吾々が心の中で彼彼の自暴自棄的な絶望に對して、用意して置いた所の同情への費用が、不用となり他にその使ひ途を失ふて了ふのである、そしてそれがユーモアに伴ふ放笑となつて來るのである、とフロイドは、總ての笑を「節約された費用の放出」に歸してゐるのである。

そこで私は、笑に對する他の學説をこゝに考へ合して見ることにしよう。舊き笑の學説として、サー・アーサー・ミチエルの「笑は心的無秩序の状態である」といふのが擧げられる。そしてその説は今日一般に非難されてゐる、心的無秩序の状態であるならば、それは狂氣の状態ではないかと。然し私は、ミチエルが心的無秩序と云つたのは、先走つて用意された心の費用が逆戻りし尻餅をつく、換言すれば配置されたるエネルギーが節約されて、その方向を笑に轉換する時の、心の一寸拍子抜けする状態をば意味したものでないか、と善意に解釋しようと思ふ。

x

又、スペンサーの「笑の心理學」によるならば、笑は魂の興奮を搬出し發散する所の現象であつて、この興奮が精神上に現はれた際に、ある障礙に衝突した證據である。又彼は、笑は元來意識が無意識裡に大きなものから小さなものへとうつりゆく際に起る不調和によるものである、と論じてゐる。彼のいふ魂の興奮とは、配置されたるエネルギーであり、ある障礙と

はそのエネルギーを節約せしむることである。と考へられる。又意識が無意識裡に大きなものから小さなものへと移行行くと、即ちそこに差額を生ずることであり、節約されることである。而もその節約がなされる時には、ミチエルが心的無秩序と呼び、そして私が拍子抜けと呼んだ心の逆戻り現象がある。それをスペンサーは心の不調和と考へたのであらう。

ドガは、「笑は緊張のとれる現象である」と述べ、バインスは、「笑は抑制の軽減である」と論じてゐる。そしてそれは不充分なる説明である。然し緊張のとれることによつて、又抑制の軽減されることによつて、費用が節約され、そこから笑の費用が生じて来ることを、言はんとし、而も言ひ足りなかつたものであらう。

x

笑の哲學に就いて又閉却し得ないものは、ベルグソンの學說であらう。ベルグソンの學說は一言にしていふならば、「笑は生活の器械化からである」といふのである。彼は云ふ、人間の態度、身振り、行動が可笑味を帯びて来る程度は、身體が、吾々に單なる器械として考へられる

程度に、正確に比例してゐると。又彼は、笑は、人々が「物」の印象を吾々に與へる時に、何時でも起るものであり、約言すれば、笑は、器械として生命のある物を錯覺する時に起るといふのである。だからそれは又生物より無生物へ錯覺的に左遷されることである。とも考へられる。そして又ベルグソンによれば、笑は効果を持つてゐる。笑はそれによつて、その錯覺を匡正する。何故ならば、笑はその錯覺或は無秩序に對する反動であるからである。従つてそれは眞理を回復し、無秩序を排除するに役立つものであるといふのである。

先づ私は、彼からその學說の説明を聞くことにしよう。今こゝに全く同一なる二つの顔があつたとする。そして人々はそれを見て笑を感じたとする。では何故に笑を感じたかといふに、それは生命のあるものは、吾々の期待に従つて決して完全に似たものを反覆してゐないのに、今それが反覆されてゐるとすれば、吾々はその生命のあるもの、背後にかくれてゐるメカニズムを想像するからである。又人眞似は滑稽である。そしてそれは精神の作用に於いて機械的な自動作用をば發見するからである。實際生きた人間に就いて、生命のないメカニズムを考へさせる様なものは、すべて滑稽であり、笑を放出せしむるに傾すると、彼は主張するのである。

そして私は、更にこの説をば討究して見る必要があると思ふ。

x

成程、今、仲人が男を見合の爲に娘の家へつれて行つた、そして客間で娘さんの出て来るのを待つてゐる間に、仲人はこれ見よがしに銀製の器具が硝子の陳列棚にづうと羅列されてあるのを、目くばせしながら、「これを御覽なさい、立派な銀製品ぢやありませんか、これだけでもどんなにお金持かど解るでせう」といふ。男は「でもね、金のある様に見せかける爲に、一寸借り集める人も往々ありますからね」と疑はしさうに云ふ。仲人は周章氣味に、「まあ、そんなことがあるもんですか、第一こんな家へ物を貸す人などはありませんからね、大丈夫ですよ」と附け足した、といふ話や、甲が自分のしたことを乙になすりつける爲に、或會合の席へ乙より早く行つて、自分のやつたことをすつかり乙がやつたかの如く吹聴した、「乙はね、その女にハンカチーフを取られたよ」と云つてゐる所へ、乙がやつて来た。友人等は乙に、「君は、女にハンカチーフを取られたといふぢやないか」と彌次る、乙「何に？ それは甲だよ」甲「馬鹿

を云ふな、君ぢやないか」乙「戯談をいふな」甲「何が戯談だ、極り悪がつてゐら」乙「然し何に甲の持つてゐるものは安物だよ、一枚十錢位かね」甲「おい馬鹿も休み〜云へ、あれでも三越で買ったんで、一枚八十錢もしたんだぞ」一同はどうと笑つた、甲は「いや、ばれたか」と頭をかゝへた、といふ出来事を考へて見ると、精神の自動作用、即ち情性的に、自分の意志から切離されて機械的に動く、そこに笑が介在して来ることは確である。

x

然しながら吾々は直にその「器械化」に笑の直接原因を置くことは出来ない。又ペイレはベルグソンの説をば非議して、メカニズムとして錯覺し、幻惑的に把持するといふ説の後半、即ち「幻惑的に把持する」にその重點を置き、吾々の把持は誤られるかも知れない、そして笑は誤りから起るかも知れない、然し笑は、又把持により理解によつても、正當なるものとされることがあり、完全に正しき把持が多くの場合笑にまで導かれることがある。一言を以てすれば、吾々は幻惑的把持によつて、事象を可笑しくすることは出来ない、それは寧ろ事象の状態で

あつて、状態は評價や鑑識の働きを暗示し、そして又笑を暗示する、そして把持はその状態を歪めることは出来ない、だからベルグソンの誤謬は、状態の理智的把持と、状態の評價とを混同したのにある。笑は單なる理解の過程にはなく、笑が起る爲にはその状態が、その目的に照されて評價され、それと不相應の關係にあることが發見されねばならない、と論じてゐる。

けれどもそれは、評價されて不相應の關係が發見されたならば、何故そこに笑が發生するかを未だ説明してゐない。そしてそれは矢張り生活の器械化と同じく、不相應なる關係の發見によつて、輕減されて來る費用の放出に、笑があると考へられねばならない、だからそれは又「笑の尻餅説」である。然し勿論笑は猶より多くドウマの主張するが如く、生理學的に考究されねばならぬテーマであると思ふ。

突貫價値の哲學

x

T 大學の S 學科の新入生歓迎會である。

「自分の白髪は遺傳だ」

と云はれてゐるが、全く白頭になつて了はれた Y 氏が、S 學科の第一回卒業生、大先輩、前總理大臣秘書官の故を以て、コーヒーが出ると、幹事の指名で椅子から立ちあがられた。

話は、自分の大學卒業當時の回想から始まる。

白樂天の詩にもある様に、自分は、今御覽の通りの白頭翁だが、でも大學を出る時には、まだ紅顔の美少年であつた。大學の前に美濃屋とかいふ紙屋があつて、大學の卒業證書を入れる筒を買ひに行つたら、高等學校の卒業生と間違つて、高等學校の證書を入れる筒を賣られたので、憤慨したよ。

といふ、樂しさうな憤慨談から、佛蘭西留學の話となり、ソルボン大學で學んでゐた時に、ビリヤードをやり、ロンテニスもやつた、といふ所から一轉して、

今の大學卒業生には常識がない。だから今日の如く就職難があるんだ、ではこの就職難を切抜けるにはどうするか、といふ、吾々の等しく聞かんとする結論へとやつて來た。

「……それは、常識即ちコンモンセンスを養ふことだ、Y 君、君、將棋をやるかね？——さアどうもまだやつたことがありませんので——」ちや碁はどうだね、それも……駄目か？……では話にならない。

ロンテニスをやり、ビリヤードをやり、ゴルフをやる中に、會社の重役なり、支配人なり、又は局長なり、次官なりと知合になり、口にもありつけば、又出世も出来る、と云ふ様な譯である。だが新入生諸君は、勉強も大切であらう、一生學者にならうと思ふ人は又特別であらうが、大學を出て、實社會に活動しようとする人は、今から心掛けて、將棋や碁でも習つて置くんだね」

といふ話。碁や將棋によつて、口にありつき、出世しなければならぬ時代になつたのか。自分分は聞いてゐて、歎けしいとは思ひながらも、それは確に實社會の一つの實相であつたに相違ない、と考へた。

X

それから多くの先輩が、次から次へと五分づゝ感想を述べ出して来たが、要はたゞY大先輩の常識説に、蛇足をつけたに過ぎなかつた。

幾人目かにT市役所の大御所と綽號されてゐる、若いS君が立つた。

「先づ諸君、新入生諸君は、先生のキンタマを握ることが第一である、I君などは、在學當時既によくT先生のキンタマを握つてゐたので、自分よりもより良い條件でよりよい處に就職の周旋を受けてゐる。」

そして彼は、又そのコツで重役のキンタマを握つて、より早く出世してゐる。キンタマである、これを握るコツの研究である。先づT先生でも、I先生でも、よいから早くそれを握ることである、では如何にしてそれを握るか？ 諸君、幸にもI君がここに出席してゐられるからI君からそのコツの傳授にありつかうではないか」と常識説に置換するに、キンタマ説を以てした。

然し、I君は笑つて、その秘傳公開の要求に應じなかつた。二三人の人々によつて、キンタマ説の討論がやられた。すると獨逸社會學の研究者だといふK君が立つた。そしてそれをその専攻してゐる關係學から解説しようとした。

「キンタマを握ることは、要するに、その人と密接なる關係に入込むことである、だから諸君は、先生の宅へ時々訪問することを忘れてはならない。そしてその研究に就いて親しく指導を受け、その人格に於いて直接感化を受けねばならない。よしそれは不純の動機からでなくともさうやることによつて、先生に自分といふものを知つていただけるからである、……」

と、このキンタマ説はアウフヘーベンされて、關係説となつて来た。

X

A君は、吾々の先輩で、操觚界の第一人者であつたが、嘗てこんなことを云つた。

「……君、實社會に出て出世しようと思ふなら、今日は日曜日だ、新妻と多摩川べりへでも行かうか、なんて呑氣なことを云つてゐたら到底駄目だね。今日は日曜日だ、さうだ、社長さん

の宅へ行かう、それも玄關から入つて行く様では、まだ駄目である。勝手口から入つて行く、口のまだ利けない坊ちゃん、庭で一人遊びでもしてゐたら、もう占めたものだ。

突飛すんだね、そしたら勿論轉ぶ、そして泣くだらう、泣いたら占めたものだ、それを抱き上げて、砂を拂つてやりながら、お髷の一つもつねつて、あやしなから——お坊ちゃんがお轉びになつてまア——といふ具合に女中なり、奥さんになり渡すんだね、所で、度々同じい手をやつてはいかない。君が行く毎に坊ちゃんが都合よく轉んだり、遂には君を見るなり火の附いた様に泣出したたりするからね。

先づ將を射んとすれば馬だ、女中だらうが、書生だらうが、Aさんは親切な人だとか、よい人だとか云はれる様になれば、それは自然と奥さんの耳に入らないではゐない。奥さんの耳に入れば、又自然社長の耳に入るといふ様を譯でね——Aは面白い奴ぢやのう——といふことになる。そこで女中さんが干物をしてゐたら、一寸、手傳ひませうか？ と高い所へ竿をあげてやる、書生が庭を掃いてゐたら、一寸草を捲つてやる。

君ばかりではない、細君だつて、女は女同志といふから、奥様のお機嫌伺ひに出て、梅干老

婆ののろけ話でも拜聴せねばならない。これを稱して臺所政策といふのだ、この臺所政策が上手でなければ、一生うだつが上らない。

俺も男と生れて勝甲妻はないと思つて、やらないでゐると、どん／＼後から入社した奴に追越されて了ふので、癪だが近頃やり始めたよ。何に、やるとなりや徹底的にやるさ、うん、それで近頃は少しはよくなつたがね。どうだね、君、君はやれるかね、やれまいて、学校の先生なんて奴は、微温湯に入つてゐる様なものでさ、まア、それで一生終るんだね」

と言つた様なことを、……私は思ひ出した。

ちや、それは吾々サラリーマンの習性であり、奴隷性ぢやないか？ 入學早々の歓迎會に

こんなことを聴かされる様な時に變轉したのだな、吾々の學生時代はまだ少しは明かであり、光明的であつたが、と考へると私は急に淋しくなつて來た。

x

然し、多くの先輩共の中に、私は、遂に一人の同志を見つけ出すことが出來た。彼は自らい

「百姓面をしてゐる」と名のりをあげた、N新聞の記者である。

「學生は、矢張り勉強が第一だよ、俺は、碁や將棋などは、どうでもよいと思ふね。そしてさ、學生は學生らしく、朗かで、明るくつて、こせつかないことだよ。大學の前あたりのおでん屋で飲んでさ、ねえ君、大にやるさ。今から就職のことをくよくよく考へる様な奴に限つて、卒業したつて職にありつけこはないよ。」

然しね人間は、各々特色を持つてゐることが、第一に必要なだね、出來合服の様な奴は駄目だよ、何か變つてゐなければならぬ。俺などは、この百姓面に特色がある、一度會つたら相手がお忘れつこない、その點で俺は親爺に感謝してゐるよ。

濱口だつてさうだ、あの面がなかつたなら、總理大臣にはなれこはなかつた、それは請合つてもよいがね。丸山ツル君だつてさうだ、あのツルくした光頭がなかつたなら、まア警視總監で器ではないね。どうだ、安達内相の陰險そのものゝ様な、額から鼻柱へ走る暗影は、あれだよ、彼奴を今日の地位にしたのは、そして又總理大臣になりそこねさしたものは、

これは先日落語家から聞いた話だが、昔の千兩役者といふ奴は、特に鼻が鷹鼻で大きいとか、

顔中目だとか、ペラ棒に長い顔だとか、甚しく顔に特長がなければなれなかつたさうである。さうだ、諸君、寫樂の書いてゐる千兩役者の似顔があるね、あれだよ。

何でもよい、奇抜の名でもよからう、昔のやつが悪七兵衛景清なんてのも効果は充分にあつたらうし、地震學者の中村太郎左衛門なんてのも、悪くはないね。

何でもよいよ、つまり、例へばだ、猥談でもよい、さうだ、猥談結構である。猥談に於いて第一人者になつて見給へ、社會は決してその利用を、永久に忘れてはゐないから、くよくよく心配しないで、何か、何でもよいから、第一人者になつて置くことを今から心掛けて、ゐさいすればよいんだよ」

と百姓面は、元氣一ぱいに云ひ放つた。私は、その元氣一ぱいの所に同感した。

x

社會は廣い、成程、どんなことでも第一人者となつてゐたなら、よも食ひはぐれはなからう。私の學生時代に「社會事業」といふ雜誌に、乞食の事を、毎號細々と、何處の寺の縁の下には

何人か、何處の塵芥捨場には何人か、バットを一本やつて、こんな話を聞いた、と根氣よく書き續けてゐた男があつた。

その當時、私は、こんな事やつて何の役に立つのかとさへ怪しんでゐた。處がその男は何時の間にか、東京市の囑託となつて、浮浪人の調査をやり、今では東京市の主事となつて、その方面の研究を擔當し、近時ルンペン論の盛となつて来るにつれ、觀奇氣分の流行するに伴つて、新聞雜誌に活躍し出して來た。そしてその男といふのは、確にこの方面に於いて第一人者である、草間八十雄氏のことである。

實際、それから私の人物觀は全く一變されざるを得なくなつた。何でもよい些細のことでもよい、日本社會に於いて、その第一人者になることをば、先づ吾々は心掛けねばならない、と。

x

けれども更に私は考へて見よう。では、この特色説、即ち第一人者説と、常識説とキンクマ説又は關係説との間に、共通なる原理がないかといふことを。

そこには共通なる目的がある。そしてそれは等しく相手方をして、先づ自分をより認識せしめるといふことである。

特色説は、その才能によつて認識を求め、従つて相手方の理智と計數に訴へる。然るに常識説或は關係説は、その交遊によつて認識を求め、相手方の同情と嗜好とに訴へんとするものである。

こゝに理智と感情との對立があり、計數と嗜好との闘争がある。

私はまた長く役人であつた男から、即ち官界游泳の達人から、こんな話を聞いたことがある。「……總て上役に可愛がられようと思ふなら、少しは馬鹿になり、そして屢々小言を頂戴することである。例へば、或事務を處理するにしても、それを如何にすべきであるかと、ちやんと解つてゐようとも、決して解り切つてゐる様子を、上役に見せてはならぬ。——一々何だい君、これ位のことを、君一人で處理出來さうなものぢやないか、——と小言を言ひながらも、その處理について、上役は、御意見といふものを求められた方が、大に心持がよい。それを反對に、どんく事務を處理して、何に課長に聞く程のこともない、課長だつて煩は

しいだらうから、と、水の流るゝ如く敏腕に、事務を裁いて行く——どうもあの奴は生意氣な奴だ——と、決してお覺えは目出度はない。何かの機会があると左遷されたり、首になつたりして了ふのに、無能の男は、上役に可愛がられて、上役の出世することに——あの奴は、薄馬鹿で、俺でも目を掛けてやらねば氣の毒だ、まア、心掛が悪くないから——と、いふ様な理由にならない理由で、引上げられて行くものだよ。

だけれども、それは平穩無事の時であり、好景氣時代のことである。機械的に、慣行的に、その事務が運ばれて行き、獨り手に金がころがり込んで来る時代のことである。一旦逆境時代深刻なる不景氣時代に立つと、人々は先づ嗜好を投擲して、計數に走り出して来る。そして感情は理性の前で、無慙にも清算されて了ふ。そしてそこで、今迄疎んぜられてゐた有能者が、重用されて来る。……そしてさうは意識してゐるものゝ、永い間の官吏生活を考へて見ると、自分もその嫌ひがないでもなかつたことを、恥しく思ふよ。そこは矢張り、人間だからなア」と人間性に、その罪を轉嫁してゐる。で、その關係を次の公式とすることが出来る。

(1) 好景氣時代(順境時代) = 劣能者没落時代 = カラコリーマン第三化時代

(2) 不景氣時代(逆境時代) = 特色有能者時代 = 無能者没落時代 = カラコリーマン第二化時代

x

然し、私はこの人間性の非難に對して、多少の抗辯を挿入して置かねばならない。

漢人は、それを「狡兎盡きて良狗煮らる」と非難し、私も、曾ては漢の高祖が、その覇業をなし遂げた後に於いて、良將であつた韓信を屠つてゐる行爲に對して、少なからずその卑劣さを非難せずにはゐられなかつた。

だが私は、私の知人に三人の韓信を持つことによつて、その所信に多少の變更を加へねばならなくなつた。彼等三人は剃刀のそれよりも切れる、「切れ過ぎて危険である」とは、等しく彼等に下されてゐる評語である。

M君は、好調の某紡績會社に於いて暗にストライキを煽動し、それによつてその支配人を没落せしめて置き、自分の手でストライキを鎮壓することによつて、支配人とならんと計畫した。けれどもそれは未然に暴露されて、彼は首とならざるを得なくなつた。然し彼もさる者である。

木からいつまでも落ちてはゐない、當時その社運は傾き、同業の競争會社によつて、將に壓倒されかけてゐたN會社に、支配人として拾はれて行つた。

そしてそこは洵にM君にとつて、適所であらねばならない。華々しい財界の戦士としての、彼の舞臺姿がはつきりと描き出されて來た。N會社はグイ〜と他の競争會社を縦横無盡に殲倒し、木破微塵として來た。また〜く内にポロ會社は一flow會社となり、遂には断然、紐育の世界市場に於いてN會社の株券が賣買され、その高低は日本財界のベロメーターとされて來た。しばらくN會社の全盛時代がつゞいた。

今や切るべき何物もない、刺すべき何物もなくなつた。でもM君の剃刀は益々冴えるばかりである、遂に彼は自分の會社を切り出し、自分の社長をも完全に切つた。

泰平の世、名刀は袋さるべきである。

そして私は思つた、若し高祖が韓信を屠らなかつたならば、必ずや反對に韓信が高祖を屠つたであらう。高祖の明なきT社長は、斯くして没落せしめられて行つた。

又S君の剃刀性は、恩師を切つた。悪意であり、忘恩の徒であるといふ譯ではなからう、彼

の持つ剃刀の切れ味に、自分で魅惑された結果であらう、と考へられる。そして彼は、次に、その弟子を無遠慮にも大量的に切りはなした。だが又それは決して無慈悲の故ではなからう、そして彼は今何を切らんとしてゐるか？ 私は、それに多大の興味を繋いでゐる。

H君は、その剃刀性によつて、親友といふ親友を傷けた、そして彼は政界へと出て行つた。私は、彼がその親玉を如何にして切りさいなむかに、今關心を持つてゐる。

敵なくしては、彼等と共にあることは甚だしく危険である。敵を與へよ。仕事を與へよ。然らば彼等は益々冴え、多々益々辯ずるであらう。だから亂世の名將は、泰平時に於いて悪臣であり、謀叛人となる大なる傾向を有してゐる、と考へねばなるまい。故に又好景氣時代に於いて、剃刀は遠ざけられ、無能者が採用される、必然的な理由がない譯でもない、と思ふ。

x

剃刀よ！ 然るに現代は、財界に於ける亂世である。平凡の無能者よ！ 何時までも、好景氣時代の情實時代を夢想してゐてはならない。

深刻なる不況は何時の間にか、諸君の割間性を清算して了つてゐる。だから諸君の首は祇の如く飛散するではないか、社會はこの未曾有の不況打開の爲に、戰士を求めてゐる、屬るれば切れる剃刀の切れ味を求めてゐる。故に現時に於いては、大戦後の好景氣時代に通用したる常識關係説は没落して、能才第一人者説がそれに取つて代られねばならない。

突貫だ！ 突貫時代だ！

財界に於ける英雄崇拜時代だ！

人件費の整理緊縮は、切れる者をして、四五人分、否、數十人の仕事をやらせよう、と考へ出して來た。だから又近時社會は、その能才者に目をつけ出して來た。今、能才者があり、それが算盤玉に合ふならば、より突貫な高給を以て引抜き行くことに、少しも躊躇しなくなつた。見よ！ 米國の人物經濟學は、その「引抜き政策」を中心として、渦を巻いてゐるではないか

日本財界も亦これを倣ひはじめて來た。

斯くしてブルは「抜かん」とし、プロは「抜かれん」とする。そしてその機を握るものは、

「突破」の一言につきてゐる。

よし再び好景氣時代が來た時に、又その愚物に歸るとしても、少くとも現時に於いては、諸君は尖鋭化したるその能才を以て、突貫することである。諸君現在の役なり、重役なりが、若しそれを認識しないと、社會はそれを認識しないでは置かない。

そこに一時不當に擯取される、腹立たしさはない譯ではない、然しそれは自個を正當に價値づけるデモンストレーションである。そして私は、こゝにサラリーマンの突貫價値を認識しようとする。今や、社會は價値の附替時代である、だから吾々は、先づ第一に、自分を正當に價値づけ替へねばならない。

ダンスを知らない人種

×
×
17
×
×

Sは有名な電気會社の社長である。彼は發電所及び發電機の視察の爲めに維納のV會社を訪ねて行つた。V會社は大切なお得意様といふので、到れり盡せりの、歡待振りであつたさうである。

彼は國境近くの山又山の中へと自動車を驅つて、その會社が自慢の礦山とその製煉所とを見るが爲に案内されて行つた。そこで製煉所長は、この黄色なお客様をばもてなすべく、本社より電命を受けて考へた、彼は聖書に「己れの好む所を人に施せ」とあることをば思ひだして、「さうだ、長い間の一人旅だ」とうなづきなながら、その晩、Sの爲に舞踏の會が催された、そしてSが正客としてダンス・ホールに招じ入れられると、十數組の若き男女が相擁して、ダンスを始めて行つた。

數本の酒がSのテーブルで抜かれた頃に、兼ねて所長の内意を受けてゐた、美しい女事務員の一人が、Sの前に進み出て、Sにダンスのお相手を申出た。「美しい女だつた、何となくイトがあつて、若し自分が少しでも踊れるならと思つたら、内太股の筋肉がかすかに痙攣を起して来た」と五十の坂を越した彼がいふのだから、ボヘミア系の美しい女であつたであらう。

彼は恭しく執られた手を拂ひのけて、「駄目です、踊りたいが駄目です」と云ふ。所長は何かの本にホッテントット、パンダル、フッシュ、どんな野蠻人でもダンスが好きであると書いてあるのを讀んだことがあるので、Sがダンスを全然知らないとは思ひも寄らなかつた。だから所長は、その相手の女がSに氣に入らないものと早合點をした。そして他の女に目くばせがされた、だがSは本當に困つてゐるのである。彼が踊れるなら、丸太棒でも踊れるだらうから。伯林に歸つたSは、所長からの手紙を受取つた、そしてそれには「女からその節は失禮いたしました」といふ傳言がある。伯林に長くゐた友人の一人が云つた、「それは女に氣の毒なことをした、男にダンスを女から申込んで断られたら、女の恥辱だよ、どんな場合でも男はそれに應じてやらねばならぬのが禮儀だ、今頃女がその仲間に見身をせまくしてゐるだらう。昔、ロシヤでは、復活祭の日に、「基督は復活し給へり、お目出度う」と男から女に言葉をかけるならば、それが一兵卒と女帝とであつても、女帝は、「さうですよ、お目出度う」とキッスをしてやらね

ばならなかつた、それと同じ位やかましい慣習だ、而もダンスは、男から女に申込むのが禮儀なんだからな」と教へて呉れた。それでSはまだ眸の底に残影のある美しい女の爲に、氣の毒でならなくなつた。彼は手紙を書いて貰つて、「日本人は本來ダンスを知らない人種だ」といふことと、その女の名譽恢復の爲に、女持の腕時計とを送つてやつた。

四五日して所長から再び手紙が來た、それによると、Sにダンスを申込んだ女が三人ある、その中のどれにその腕時計をお贈りになつたのか、とその名前まで書込んで來た、Sは困つた。さりとて新に二個の腕時計を送り足すには、彼は餘りに吝嗇者である、又「その中で最も美しい女」と書いてやるだけの勇氣もない、結局彼は黙殺することにしてゐた。

それから一ヶ月たつた、所長はその腕時計の處分に窮してゐる、だからSの同意があるならば、その腕時計をボンボン時計に換へて、それを女事務員の食堂にかけた、そしてその下に、三人の女の名と寄贈者Sの名をば貼付け、「日本人はダンスを知らない人種である」といふことを、無學の彼女等に知らせてやりたい、だから「日本人はダンスを知らない人種である——寄贈者……」と書いた紙にSの署名を求めて來た。友人達は大笑ひもし反對もした、だがSは、

「まあ、仕方がないさ」と署名した。「今でもそのボンボン時計が、チクタクと、日本人はダンスを知らない、知らないと思つてゐるかと思ふと、そして又横太利の山奥で、日本人といふものを初めて見た女達が、日本人で怪體な人種やアと思つてゐるかと思つてゐると、俺はなんだか日本人に對して、濟まない氣がする」とSは云ふのであつた。

x

日本で哲學者として有名であるX老博士は、その若かりし時、柏林で盛んに踊つたものだからである。然し博士はどうしても踊が上手になれなかつた、そしてそのステップが相手の女と合ない、唯女に引摺られながら、自分の足下にのみ注意を集中して、下手な柔道家の様な腰付で女の腰にしがみついてゐる。だから自分の左の腕を女の腕に軽くつけて、その腕の接觸一つで女を意の儘に踊らすなどといふことは、思ひもよらぬ藝當である。反對になるべく偉大なる體格の女を選んで、それに振廻して貰ふことを、唯一の望みとしてゐた。

然し如何にその女が踊の名手であつても、博士の腰付には閉口せざるを得なかつた、博士は

その半周を描くことに、お臂で隣りの男、隣りの婦人を押倒さうとする。そのたびに博士は「バアドン」といふ。博士は「バアドン、バアドン」と連呼しながら踊つてゐた。従つて誰いふとなしに博士のことを、「プロフェサー・バアドン」と呼ぶやうになつた。相手の女が苦しまぎれに博士を、ホールの隅につれて行くと、博士は壁にお臂を打附けることに、矢張り敵意に口癖になつてゐる「バアドン」を連呼する。そしてそこで「プロフェサー・壁」と悪口する者さへ出て来た。新しくして、ワンド教授の名聲は、當時、伯林に日本人が珍らしいだけに、噴々たるものであつたさうである。

パリ新聞が大見出しで、ブローニーの森に女神が出た、街の女と米國の外交官とが眞裸になつて踊つてゐた。女は醜業婦として罰せられたが、男は外交官の治外法權によつて放免された、だが直ぐに本國へ召喚され、免官となるだらう、と米國人の巴里で流す毒舌振りに憤慨してゐた民衆は溜飲をさげた、「痛快だ」といふと、「痛快だが、然し日本人には餘り痛快がる權利はない」と新聞を見せに來て呉れた同じアパートにゐる劇場の副支配人がいふ。「何故に何故つて、先年矢張りブローニーの秘密ダンス俱樂部へ、警察が手入をした、その時日本の非常

に有名な方が、本當の眞裸でおかめの面をかぶつて踊つてゐた。一昨年もクリシーの下等なダンス・ホールで、日本では偉い經濟學者だと自慢してゐる男が踊つて、踊り子の足を踏んで、滑つて轉んで、鼻を床板に打附けて、鼻血を出しながら、上衣を取つて怒り出した、と云ふぢやないか、君も踊るかね」「いや」「どうして」「どうしてつて、日本では紳士は踊らない、踊るのは職業的で極く下等の階級の獨占事業だから、サムライは踊りを知らない」と尤もらしく説明してやつたら、「成程」と感心してゐた。

三週間程して、「出たよ」と云つて、副支配人が持つて來た雜誌「流行」を見ると、「日本から最近來た社會學者赤神教授の話によると、日本のサムライ即ち紳士階級はダンスを知らない。だから日本人でダンスを知つてゐる者は、その生れが奴隷階級であつた證據である」と面白く可笑しく書いてある。「本當だね君」「本當だとも」と云ひながら、私も亦S社長の様に、踊る日本人に濟まない様な氣がした。

ジャーナリズムの頽廢

×
×
18
×
×

X

吾々の日々の世界は、新聞紙によつて作られてゐる。吾々はその隣人の生活に就いて知るよりも、總理大臣の静動に就いてより多くの事を知り、妻の生立よりも、時として人気女優の生立に就いて、より詳細なる事を知つてゐる。そして吾々は自分の書齋の温度よりも、倫敦の温度を知り、自分の誕生日は失念してゐても、カントの誕生日は、必ずこれを記念せしめられてゐる。

吾々は、朝その同僚と語る前に、先づ新聞紙を読んで、そこに共通なる話題を捉へ、歸途電車の内にて、その日の夕刊から家人に物語る種子をば仕入れてゐるのである。それ故に吾々の社會人としての意識は、日々新聞紙を介して作られ、自己そのものゝ活動は、たと單調一律なる生産機械としての意識を伴ふてゐるに過ぎない。

斯くして普通の新聞紙は、常に現在を強め、過去に於ける區々別々なる傳統を弱めてゐる結果として、同一なる記事によつて、人々の心を同一方向に轉ぜしめ、絶えず新しき共通なる利

害關係の感じを分譲して、社會と個人とを結びつけ、社會生活に於ける案内者となり、教育者となり、裁斷者となり、地圖となり、道しるべとなるのである。

故に吾々が新聞紙なくして、その日の生活をなすと云ふことは、そこに大なる不安を感じざるを得ない。今や文明人の生活は、直接社會そのものに依つて保障されてゐる結果、その社會をば理解するといふことが、その生活に必要な第一條件となつて來た。こゝに新聞紙は又人々に對して大なる權威を有し、輿論の機關となり、自由に民衆の意思と思想とを左右し、輿論によつて立つ所の政府を統制し、斯くして新聞記者は、社會に於ける無冠の帝王なりと呼ばれ、ボルグをして、彼等は議會を組織する貴族・僧侶・平民の三級が合せし力よりも、更に偉大なる力を有する第四級である、と嘆ぜしむるに至つたのであつた。

然るに人は力を求めて飽くことを知らない。故に若し社會に於いて、その力を牽制し、それを統制する所の第三者が存在しない時には、その力は次第に増量し、それを所有する者の爲に利用せられ、悪用せられ、爲に社會は必然多大の災厄を蒙らなければならなくなる。即ち彼等が自己の強大を専念すると云ふことは、反對に彼等の覆滅に對して、彼等自身が専心する結果

を齎して来る。絶大な力を有するものは、他より撃肘を受けない、そして他より撃肘を受けないと云ふことは、自己が辿るべき進路の正否を知る指示星を失ふことであり、特権階級がマルクスの云ふが如く、自己の無能と腐敗とに氣附かず、畢竟自分の墓穴を掘ると云ふことは、また力を有し、その力を撃肘する他の階級が存在せざるが爲に外ならない。

それ故に社會に於いて存在する力は、互に相對的でなければならぬ。互に他によつて牽制せられると共に、轉じて他を撃肘するものでなければならぬ。モンテスキューの三權分立説も、政權が一人或は一つの機關に集中せしめられて、絶對の威力を有するものであつてはならぬ。それは立法・行政・司法の三權に分立し、確然と獨立した權威でなければならぬ、と論ずるのは、要するに社會に於ける權力が相互に獨立せる主體に所屬し、その權限に於いて、相對性が必要であることを力説したものと考へられる。そして又古くはアリストートルによつて、第一は公衆の集會であり、第二は國家の公吏であり、第三は裁判所であると云つてゐるのも、民衆はその集會によつて法律を作り、以て裁判所の行動を撃肘し、裁判所は國家の公吏が民衆に對してなす不正なる行動を監視し、又國家の公吏は更にその民衆を統制する力を有する、關係

の存立する必要を認めたまのに過ぎない。實に社會的力は蛇と蛙と蛤ととの三味みであり、ジャン拳に於ける石と鉄と風呂敷とであり、狐拳に於ける狐と庄屋と獵師とであらねばならない。何故ならば若し吾々が狐を有せざる時には、庄屋は絶大な威力を振ひ、吾々はその暴政に堪へ得ない。これ君主專政制が往々苛酷なる暴政に墮し易き理由であり、そこに立憲の運動となり、又多數プロレタリアに對して生殺與奪の權を有する資本家階級に對して、労働者組合の發生と發達とを必要として來た所以である。

* Kautsky, The Working Class, Pp. 3—4; Fairchild, Labour and the Industrial Revolution, Pp. 164—5.

** Angell, The Press and The Organization of Society, P. 15.

*** Aristotle, Politik, Buch. IV, Kap. XIV.

**** Brook Adams, The Theory of Social Revolution, Pp. 27—8.

x

然るに吾々は不幸にして新聞紙が、現代社會に於いて餘りに絶大な力を有してゐるのに反

して、それを撃射すべき者の力が餘りに微弱なるを感ぜねばならぬ。無名なる者は活字を狂愛し、有名なる者は活字を恐怖して、共に病的に走り、唯單に新聞紙の論調に附和雷同し、迎合追従して、社會的政治的集團的行動を決定すべき唯一の基礎事實を給するものとして、それを信用し、それを權威づけてゐるのである。この權威の強大であると云ふ事は、前に述べしが如く當然護民官たるの地位より下落して、民衆を煽動する者となり、次いでその新聞紙を生産する者の私利を本位とし、私慾を充す所の要具と一變して、而もこれを統制する程の力を他に有せざるが故に、新聞紙は次第にその社會的職能を裏切つて、遂には社會を欺瞞し、虚偽の報道によつて事實を汚毒し、誇張し、尖鋭化することによつて、社會の獵奇的風潮を泡立たせ、又流言により蜚語によつて、民衆を窒息せしめて來る。そこに又新聞紙の不信に對する社會的自覺が發生し、その權威を根柢から倒壞する時が、何時かは必然的に當來せねばならなくなる。そして現今は新聞紙の力が、極大に到達し、従つてそれが社會を欺瞞する點に於いても、そのクライマックスに近づき、新聞紙は虚偽の報道を以て、その本來の使命とするが如く、甚しき誤解をも敢てなす者をさへ生ぜしむるに至り、明かにその外殼が寸斷される時期に近づきつゝあ

ることを、吾々に感ぜしめてゐるのである。

そして近代の新聞紙は、商品として資本家的企業により、ニュース製作工場に於いて、月給や日給によつて雇はれ、専門的職務をなす非常に多数の人々——通信員・編輯者・植字工・校正掛・印刷工・廣告取り・事務員・給仕等——によつて、生産せられる結果、その事業の大なるにつれて、益々それは資本家の獨占事業に歸し、ホラス・グレリーや、チャルス・アイ・ダナの如く、自己の品性と理想とを、その新聞紙に投影するが如く、編輯することは絶対に不可能となり、彼等編輯者は悉く單なる雇人たる故に、その所有主たる資本家の私利の爲に驅使せられ、スウイントンが、既に一八九五年紐育新聞協會の宴會に於いて、

「紐育の新聞業者の仕事は眞理を歪めることである。腹藏なく虚言をつくことである。曲解せしむること、他人を誹謗することである。黄金魔の足下に尾を振りながら平伏することである。そして彼等が日々のパンの爲に、或は彼等の月給より何か少しは多くのものを得る爲に、祖國を賣り同胞を賣ることである。諸君はそれを知つてゐる、そして私も亦それを知つてゐる。そして而も——獨立自由なる新聞の爲に！——と乾盃すると云ふことは、何たる愚劣である

か？ 吾々は道具だ、そして舞臺の後にゐる金持の奴僕である。吾々は操り人形だ、彼奴等が線を引き、吾々は踊る。吾々の時間、吾々の才能、吾々の生命、吾々の能力、それは皆他人の財産だ。吾々は智的淫賣婦たるに過ぎない」

と云ふが如き、實状を呈して來たのである。

茲に吾々の精神界に加へられる資本家の最も露骨なる、多分それは手詰の且つ最も有害なる抑壓は、新聞紙發行の所有權を、彼等資本家が有してゐると云ふことである、と公言し得る。そこに吾々は資本家から二重の統制を受けてゐる。一つは巨萬の富を有することによつて、日刊・週刊・月刊の總ての新聞雜誌を獨占し、これを專制的に支配すること、その二は、大なる廣告主としてその新聞雜誌を掣肘し、その發行高は數千萬に達し、資本主義的偏見と精神の利己的腐敗とによつて、故意にその記事の選擇を誤らしめ、以て民衆の頭上より矢繼早に射掛けてゐることである。

而も吾々民衆は、これを防ぐ可き何等のものを有してゐないばかりでなく、それは吾々にとつて空氣の如く、生活必需品となつて來た。今、空氣に代へるに毒瓦斯を以てするも、吾々は

その呼吸を拒むことが出來ないまでになつて來た。吾々は將にこの毒瓦斯によつて中毒せしめられてゐる。故に吾々はどうしても、この毒瓦斯に對して適當のマスクを案出するか？ 或はその汚毒せられてゐる空氣の洗淨法を考察しなければならぬ。

* Park, The Natural History of The Newspaper, (The American Journal of Sociology, Vol. XXIX, No. 3, P. 275.)

** Karl Bücher, Industrial Evolution, PP. 41—3.

*** Bogardus, Introduction to Sociology, P. 265.

**** Ward, Pure Sociology, PP. 487—8.

***** Sidney & Peatrice Webb, The Decay of Capitalist Civilization, P. 54; Cooley, Social Organization, P. 270.

x

この考察に際して吾々は、新聞紙とは何であるか？ を知る必要がある、これを知る爲には

先づその新聞紙が過去に於いて、如何なる歴史を有して今日に至つたかを知ることが必要である。

新聞の歴史は、パークの云ふが如く社会生活の各種の條件に適應し、残存した所の様式に関するものである。そして今この様式によつて、新聞紙の歴史を分類する時には、官報期、商報期、護民期、政争期、營利期、獨立期の六期に分けることが出来ると思ふ。然しながら吾々は官報期の考究をなす前に、新聞の前期者として如何なるものがあつたか？ そしてそれから如何にして、新聞が発生したかを知る必要があると思ふ。

社会をなし、そこに心理的相互作用が行はれるには、各人は言葉によつて、自己の私的表象を公的表象となし、内的表象を外的表象となさなければならぬ。又この表象關係が複雑となり集團意識が濃厚となるにつれて、一方そこに共通の利害關係を有する人々に向つて、一時に同様な情報を公布する必要を生じ、他方公共の事件に関する情報を知るの必要に迫られて來た。カール・ビュヒアーの云ふが如く、新聞紙の本質をば情報の公布手段であるとすれば、そこに同じく情報傳達の手段たる手紙と同章との間に區別を設けなければならぬ。彼は云ふ、新聞

紙、手紙及び同章は、共にニュースを書くか、印刷に附するかによつてのみ、創作者より切離して、運送することが出来るやうに有形化されたのである。そして新聞紙が、手紙や同章と異なる所以は、手紙が個人に宛てられ、同章が特定の數人に宛てられるのに反して、新聞紙は不定なる多數の人々に宛てられたものである。換言すれば手紙や同章は私的通信の機關であり、新聞紙はこれに反して、情報を公布する機關である。

これによつてこれを考ふる時に、それは記事の内容或はそれが記載せられる形式に関するよりも、寧ろその傳達の手段と對象とに關するものであつて、その手段が如何なる範圍に向つて、そのニュースを流布するかに存し、前者はそれを限定して消極的であり、後者はそれに限定を加へざるのみならず、積極的に、より多數の人々に公知せしめんとするものである。故に新聞紙と手紙及び同章とは、こゝに嚴別される必要が認められる。

然しながら普通に新聞紙の原始的の物、或はその前期として、ニュースを報道する所の手紙或は同章が擧げられてゐる。例へばケーザーが羅馬の執政官となる以前から地方にある羅馬人は、政治上の成行や、其他、日々の出來事を、書類を以て通信するやうな一人以上の通信員を

羅馬市に常置することが、一つの慣習となつてゐた。この通信員は一般に首府の出来事に曉通してゐる知識のある奴隷、又は自由人であつて、彼等はその雇主の推薦によつては、元老院の議事をも傍聴することが出来た。アントニーは、この通信員をして、元老院の決議のみならず、演説及び投票数をも通知せしめ、又シセロがプロコンサルであつた時に、友人のエム・カエリウスを介して、クリストスと云ふ男の報告を聞いてゐた。そしてそれは通常の議事のみではなく、競技の勝敗、裁判所の判決から坊間巷間の風評をも含むのであつた。

成程、それはその内容に於いて、現今の新聞紙のそれと似通つてゐるけれども、彼等はその通信を受けることによつて、羅馬の政情を知り、以て自己の利益を計る爲に、それを獨占し、通信員はその通信を一二の雇主に送つて他にそれが洩れることを忌避したのである。それ故にこれ等の手紙は、公布性を缺き、ニュースを獨占する手段であつて、これを以て新聞紙の先驅者として考へることは出来ない。

* Park, The Natural History of the Newspaper, P. 274.

** Bucher, Entstehung der Volkswirtschaft, S. 233.

*** Bucher, Industrial Evolution, Pp. 216—7.

**** Bucher, Ibid., Pp. 218—9.

x

新聞紙の先驅者は「觸れ」である。古代の都市共和國に於いては、時々公布を必要とするニュースの生ずる毎に、それを「觸れ」歩かしめ、或は鐘により、版木を打つことによつて、一定の廣場に民衆を集め、又は一定日、例へば平日或は祭日に民衆の集り来るのを利用して、ニュースを口頭にて報道した。進んでその公布すべき範圍の大となるにつれて、觸れ役人を庄屋に送り、庄屋は五人組頭を呼び、頭は更にそのニュースを各戸に觸れ歩く、手續を取つたのであつた。

そしてそれは未だ文字の發達せざる以前に於いては、相傳へて記憶するに便なるが爲に韻をふみ、従つてそこに叙事詩の發達を來し、遂にそれは劇化せしめられて來た。故に古代希臘に於ける劇場は、新聞紙の權能を有し、その劇場に於いて、ユリピデス、ソフォクレス、アエスキ

ルス等が、常に時事問題をば演題としてゐたのであつた。就中有名なるものは、アリストファネスの Acharnians であつた、と云はれてゐる。

然るに文字の發達し普及するにつれて、口頭による公布は、文字による公布となつて來た。社會現象の中で最も一般民衆に直接痛烈なる利害關係を有するものは、確に戦争である。そしてそれは古代の比較的小社會に於いて、殊に甚しきものがあつた。従つて戦争は、この公布手段の發達を促し、例へばクセノフォンの如き有名なる戦争通信員をトロイに産し、羅馬に於いてはシセロを初めとして、ケーザーの如きジャーナリストを出すに至つたのである。

又その利害關係の強度に於いて、戦争に次ぐものは政治である。それが專制政治である場合には、爲政者の意志を知らざる爲の不利を恐れ、共和政治に於いては、自己がその政治團體の一員として、その政治團體に關し、又はその内に於いて起れる事件を關知せざることに伴ふ不利を避けんが爲に、民衆はニュースを求め、爲政者は又自己の命令を民衆に徹底せしむる爲、民衆を啓蒙し風化せしむる爲に、又民衆の中に自己の政治的勢力の基礎を築き、輿論の後援を得んが爲に、政情を一般民衆に公知せしめんと勉めて來たのである。そしてその爲に文字が

使用せられ、その原始的手段としては、民衆の多く集會する所、又は十字街頭に立てられたる高札であり、掲示板である。斯くして口頭による新聞より、手記による新聞への變遷が招來されたのであつた。

* 拙著「社會學入門」三〇頁。

** Warren, Journalism, P. 19.

x

この戦争或は政治上の必要より新聞が發生して來たと云ふことは、又歴史によつて、それを傍證することが出来る。

新聞史を考へる時に、吾々は、西曆紀元前二二〇〇年、バビロンの——所謂ハムラビ法典によつても有名なる——ハムラビ王の時代に溯ることが出来る。その當時に於いてバビロンは、メソポタミヤ平原一帯の政治的中心であつて、こゝに粘土版の新聞が作られ、又埃及に於いては、紀元前一三三二年、ラメス二世の戦績に關し、象形文字を以て書かれたる新聞を、同じく

発見することが出来るのであつた。

次に羅馬が、次第に地中海沿岸の諸國を征服し、或はそれを勢力範圍に抱擁して來ると、當然羅馬人は各國に於いて支配階級の地位を獨占し、官吏とし、收税官とし、或は他の職掌を有するものとして、羅馬よりのニュースを取る必要に迫られて來た。ここに前述の如く彼等はニュースを得んとして幾多の通信員を私設し來つたのであつた。然るにケーザーが軍事的組織を以て羅馬を統一し、中央集權的行政をなして來ると、自己が曾て羅馬を離れ、而も羅馬の政情を手に取るが如く知り得たる通信員制度の経験より、これを統制するの必要を痛感し、又輿論を起し輿論を指導する爲に、積極的にこれ等通信員に向つて記事を提供することの有利であることを理解した。この考へを實現したものが、Acta Senatus (元老院記録) と、Acta Diurna Populi Romani (羅馬日々民報) とであつた。即ちこの二つの新聞は、西暦紀元六一年ケーザーの命令により、且つ彼自身の監督によつて、官有奴隸に對し、軍隊に對し、又は市民に對して石澗を塗抹した板の上に揭示したのであつた。そして前者は元老院の議事及び決議を簡潔に記載し、後者は國民議會の記事を主とし、これに附するに簡單且つ諷刺的なる、その日その日の

ニュースを發表したのであつた。この發表せられたるものをば、例の通信員がパピルスに書取り、それをば地方に送ると云ふことになつて來たのであつた。

この新聞發行の目的は、ケーザーが自己の爲に輿論を統制し、地方在住の者へ自己の有利なる通信をなさしめんとするにあつた。それ故に勢ひその記事は事實そのものを、そのものとして發表されること少く、彼の爲にその事實が幾分歪められてゐたのであつた。殊に元老院記録は、重大なる政治上の議事に關するものであるから、そのモデヒケーションを蒙る度合も、從つて甚だしく、受信者は寧ろその記事によつて、眞の政情を知るの明をば蔽はれて了つた。そしてケーザーの歿後、益々その傾向が當局者によつて強められた結果、遂に一般の信用を失墜し、アウグスツス時代に至つて、それは廢刊されるの已むなきに至つたのであつた。何故ならば新聞の生存競争は、その發行高の競争であり、そしてそれは畢竟信用の競争であるからである。

* Warren, Journalism, P. 224.

** Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft, S. 235.

*** Lord, The Young Man and Journalism, P. 197.

*** Park, The Natural History of the Newspaper, P. 274.

X

これに反して羅馬日々民報は、各種のニュースを記載してゐた。例へば、

○ラテン祭は盛に行はれた。犠牲はアルバン山で捧げられ、そして干魚が民衆に分たれた。
○コエリウス山に火事があつた。二つの寶庫と五軒の民家とが全焼し、四軒は破損した。

○有名な海賊のデミフォーンは、リシニウス・ネルバー中尉に捕へられ、磔刑に處せられた。

○造幣司テルテニウスは、市場監督の検査なくして、肉を賣つた屠殺商に罰金を課し、その罰金によつてテルスの禮拜堂を建つる由。

等の記事により、多くの人心を引着けるやうな淫猥なる出来事、其他の犯罪を報道し、人々が自分の仲間に對して、自然に有してゐる獵奇心を喚り、それを刺戟したのであつた。従つてそれは永續し、東西羅馬帝國に分裂せし後までも、行はれてゐたと云はれてゐる。

この羅馬に於ける官報に對抗し得る東洋のそれは、支那の「春秋」と我國の「宣命」とであ

る。「春秋」は西曆紀元七〇〇年以前に、天子が人民を撫育し啓蒙する爲の布告と、天子の徳をプロバガンダーする爲の記事とを載せてゐたものであつて、それによつて天子の偉と慈とを知らしめ、以て民を容易に牧せんとしたものであつた。降つて西曆六一八年、即ち前唐玄宗皇帝の時代に、節度使の邸宅より邸報が出され、皇室の勅諭・叙任・辭令・廟堂の會議等を報じて、清朝末に至るまで繼續せられたと云はれ、或はそれが現今の北京ガゼットであると傳へられてゐる。又京報は首都のニュースを主としてゐて、西曆一三四〇年に發刊せられたと述べられ、或は寧ろ邸報より舊きものであつて、現今の北京ニュースが、その衣鉢を繼ぐものであると論ぜられてゐる。

そしてこれ等官報は、時の専制政治を支持し、時の爲政者によつて經營せられ、或は免許せられ、補助せられて、強制を以てニュースを公布し、多大の犠牲を拂つてその發行を繼續して來たに過ぎなかつた。この官報は下つて護民期に於ける御用新聞となつて、民報と相對抗し、更に變じては、政争期に於ける政黨新聞と變形して來るのであつた。

* Lord, The Young Man and Journalism, P. 198—9.

** Cooley, Social Organization, P. 192.

*** Lord, *ibid.*, P. 197.

**** Lord, *ibid.*, P. 197.

X

政治的利害關係によつて結び附けられてゐる區域内に、新聞が必要であれば、それと同じく経済的利害關係の錯雜してゐる通商區域内に於いても、その利害關係について報道をなす所の機關が、又必要とせられて來ると云ふことは當然である。そしてそれは政治的新聞のそれと同じく、市場に於ける口頭新聞から始まるものと考へねばならぬ。

古代から中世にかけて、歐洲に於ける商業の大中心地は、どうしても伊太利のヴェニスにその第一指を屈し、獨逸のライン地方にその第二指を屈せねばならぬ。實際、ヴェニスの相場は全歐洲の相場を左右してゐた。一五三六年にはヴェニスに新聞が出され、そしてそれは肉筆であり、町の或所々で高聲で読み上げられた。而もそれは、非常にヴェニス市民の注意を惹いて

來た、何故ならばそれは一ヶ月に一回出されるものであつて、その文句は華麗であり、且つ煽動的であり、尙その當時行はれてゐた土耳其との戦争がどうなる事かと、氣遣はれてゐた最中であつたからであつた。そしてこの讀賃として、各人から支拂はれることになつてゐるのは、一ガゼッタ (Gazetta) であり、この讀賃から遂に此新聞をガゼッター (Gazette) と呼ぶやうになつて來た。今、ボロウントが十七世紀に出してゐる所の「語解」に就いて、このガゼッタと云ふ言葉を調べて見ると、それは二厘五毛に値するヴェニスの小錢の名であり、又多くはヴェニスで發行された新聞や、當時起つた内外の事件に關する簡單なる報告を載せた小冊子であつて、基督教國の各所へ毎月配達せられるものであると云つてゐる。

茲に注意すべきは商業都市たるヴェニスに於いて、初めてこのニユースの讀賣が大商人の營利心を呼び醒ましたと云ふことである。彼等は、セント・マルクス圖書館の管理員であるヴァレンテネリーが研究發表してゐるが如く、ヴェニス市會の主唱によつて、共和國內のニユースが集められ、これに公使、領事、官吏、船長又は商人等の報告が附加されて、ヴェニスの在外代表者をして、國際事情に曉通せしめ、以て歐洲に於ける自國の經濟的地歩を確保する爲に、それ

を回覧急報、即ち Fogli d'avvisi (Sheets of Information) として送られてきたものの中から抜萃し、更に彼等が集め得たる所の商業経済から外國事情に至るまで、各種のニュースを加へて、夫を一般民衆に販賣せんとし、資本を投じて大規模なる營利的計畫を立て、來たのであつた。斯くしてヴェニス市のリアルト橋上で、兩替店と貴金屬錫屋との間に、商業通信が開かれ、商業上のニュース、出入船舶の行先、寄港地、出先、積荷等の報告、物價の高低、金融状態等の報道を蒐集して販賣したのであつた。恰も吾が徳川時代に於いて、神田旅籠町の「本由は新聞賣つて飯を食ひ」と云はれたる「生きた新聞」の古本屋に似通ひたるものと云ふことが出来る。

このヴェニスが次第に經濟的霸權を歐洲の天地に伸長し出して來るに従つて、そのニュースも亦權威を生じ、且つ歡迎せられて來た。そして一四三三年に發明せられたる印刷術の次第に進歩し普及するにつれて、新聞紙の發行にも應用せられ、一五六六年には Notizia scritta (Written News) が、一般購買者の爲に印刷されるに至つたのであつた。

これより先、一五二四年に維納及びアウグスブルグに於いて新聞が出され、次いでニュルンベルグ、フランクフルト・アム・マイン、ウルム、プラーグ、プレスラウ、ケルン等に於いて、

新聞紙が發行せられ、殊にアウグスブルグの大商人フッガーの手によつて、發行せられたるフッガー新聞は、一五六八年より一六〇四年までの分が現存してゐる。そしてそれは東西諸國に亙つて通商關係を有してゐた結果、豊富なる資料を有し、政治上の通信より、經濟・文學・劇著書の紹介及び廣告をも含んでゐたと云はれてゐる。

* Pendleton, Newspaper Reporting in Old Time and To-day, P. 13.

** Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft, S. 242.

*** 小野秀雄『日本新聞發達史』一一一―二頁。

**** Lord, The Young Man and Journalism, P. 199.

x

この商業的覺醒が、一四九二年より大西洋岸に波打ち始め、イベリヤ半島より和蘭に、和蘭より英吉利へと、その商業的中心勢力が移動して來ると、十七世紀には西班牙よりの商報と云ふことが重きをなし、英吉利・佛蘭西・伊太利・獨逸等に於いても、「西班牙からのニュース」と云

ふ表題を有するパンフレットが、多く出されるやうになつて来た。

勿論、このニュースの多くを先づ握り得る者は、勢ひ當時の大商人であらねばならぬ。従つてそれを發行し、發賣したのも亦大商人であつた。そして彼等はニュースの販賣そのものによつて利益を得んとするよりも、その主眼とする所は、このニュースによつて、自己の本業とする取引上の利益を計り、經濟上の優位を占め、金融界を統制せんとするにあつた。

然るに交通の次第に進歩し、郵便制度の普及し、速記術の發達して来るに伴ふて、その記事が過剰し、又相當信頼すべき筋より幾多のニュースが一所にやつて来た。そこで彼等は初めて彼等の有するニュースの内容に就いて、何等の統制をも加へず、たゞそのニュースを賣るに過ぎなかつたが、今やその多くのニュースの内より報道すべきニュースを選択し、批判する必要に迫られて来た。そしてそれは公平なる批判であり、選擇である可き筈であつた。然しそこに政治的宗教的偏見が加へられて来た。そのみならずニュースの報道は、それが新しい内のみ價値を有するのであつて、新奇だと云ふ魅力を維持するには、その事件の足跡をつけて行かねばならない。そこに一方期間を長く置かないで、定期的にその發行を繰返す必要がある、他方

にはそのニュースを運送する機會が、循環的にやつて来たといふことによつて、それは定期性を帯びて来た。一旦定期性を帯びて、社會に慣習付けられて来ると、時としてその記事に不足を生じた場合には、他の新聞同業者との競争上その不利を恐れて、そこに記事の捏造が起つて来た。

「その子パンを求めんに石を與へんや、また魚を求めんに蛇を與へんや」と聖書はしるしてゐるけれども、ここに人々は又事實を求めて不眞實を知り、信すべからざるを信ぜねばならなくなつて来た。そして社會は再び官報期に於けると等しく、玉石混淆式の報道の弊に堪へ得なくなつて来た。従つてそれはバイアス五世並にグレゴリー十三世の忌諱に觸れ、法王座から峻烈なる警告が幾度も發せられ、又その甚しきものに至つては、政府及び教會よりその發行が禁止され、又その發行權が取消されたのであつた。斯くして教會並に政府の嚴重なる檢閲の下にのみ、新聞は殘存し、この檢閲は一五〇〇年より一六五〇年に互つて、最もその苛酷さを極めた

* Simple, Influence of Geographic Environment, P. 149.

** Warren, Journalism, P. 20.

** Shoot-Writing は一六四一年に發明せられた。

** Bicher, Industrial Evolution P. 221—4.

** Lord, The Young Man and Journalism, P. 200.

X

新聞は、官報期より商報期を経て、次第に護民期へと近づいて来た。そして新聞の發行高は都市の發展と共に増大す可き運命を有してゐた。何故ならば田舎生活に於いては、新聞を読むと云ふことは贅澤であるが、パークの云ふが如く、都會生活に於いては、それは必要缺く可からざるものであるからである。

又都會生活はそこに終日の勞働より解放される所の閑散階級の發生を物語つてゐる。新聞を取りそれを讀むと云ふことは、少くとも教育と閑散との二つをその前提條件とせねばならぬ。従つて中世紀に於いては新聞の顧客は多く貴族・僧侶・官吏・大學教授或は大商人であり、且つ中

世の歐洲は、神聖羅馬皇帝と羅馬教會との二大勢力の下に、幾多の貴族によつて封建國家が形成せられ、其間に四海同胞主義が行はれ、人々の政治的生活が小區域内に限られ、その文化は僧院内に隠退して、一つの町の城壁を越え、又は一つの貴族が領有してゐる境界の外に出ては、そこに商業上の利害關係がなかつた時代から、少くとも獨逸・伊太利は、一樣なる羅馬文明によつて抱擁せられ、都市と都市との間には共通なる商業上の利害關係で結び附けられて来た。

そして相互間にその時々之の出來事、即ち Zeitung が報告せられ、従つてその出來事の報道・音信、即ちニュースを齎す所の新聞紙の意味に、この言葉が轉用せられて来た。こゝに市民は相互にその領主に對して、共通なる利益を保障する爲に、商報に加ふるに、彼等の取る可き態度に就いて、相通信し初めて來たのであつた。

然し吾々は、商報の爲にするものより、民權保護の爲にするものが、分化して來たと云ふよりは、その以前に溯つてその傾向を見出さんとするものであつた。吾々はそこに強き者の不満と、虐げられたる者の鬱憤とが洩らされ、その不満に同情し、その鬱憤に共鳴する所の多く

の人々を發見することが出来る、落書をば見落してはならぬ。落書それは當時の權門に對する呪ひの第一聲であると共に、不定の同志に對して認められたるニュースである。そして人文が進み、教育が普及して來ると、人々は自由の尊嚴に覺め、その先驅者となり、戰士となつて一戦を試みんとする。斯くしてその戦線に立ち上つた者は、學者であり、思想家であつた。

* Park, The Natural History of the Newspaper, P. 274.

** 小野秀雄『日本新聞發達史』六頁。(此頃都にはやるもの、夜討、強盜、謀論旨、召人、早馬、空騒動、生類、還俗、自由出家、俄大名、迷者、安堵、恩賞、虚軍、本領離るる訴訟人、文書入れたる細葛、追従、諷人、調律僧、下剋上する成出者……きつね冠上のきぬ、持もなれぬ笏持て、内裏まじはり珍らしや……の如き二條河原の落書)。

x

彼等は先づ教會の抑壓に依る精神上の束縛より、人類を救済せんとする人道主義に走り、その手段として、メランヒトンの如く、新聞製作者として活躍し、その通信記事の内容をば、主

として宗教的のものとなしたのであつた。この熱の高調されるに伴れて、法王の忌諱を冒しても、敢て自己の所信をば貫徹せんとする者が輩出して來た。そしてその雄なる者としてルーテルがある。彼は一五七七年十月三十一日法王廳の暴虐なる行動に對して、九十五箇條の詰問狀を城内教會の正門に榜示したのであつた。斯くして全歐洲はこの精神界の自由を、穢れたる法王の手より奪ひ返す爲に戦つた。そしてその導火線をなし、それを聲援したものは實にこの新聞に外ならない。

この宗教革命によつて人類はその精神界に於いて、自由を獲得した。そしてこの戦に於いて、民衆の味方として羅馬教會に反對した者は、當時擡頭しかけてゐた民族國家であつた。ここに又神聖羅馬帝國は、次第にその勢力をこの民族國家の爲に蠶食せられ、歐洲の天地は國家主義の高調によつて充されて來た。これより民族國家は、自己の存立を更に強固にせんが爲に中央集權を劃し、富強を計るやうになつて來た。そして民族の利益を保障する爲に行はれた所の運動も亦、その結果に於いて專制王國を作り上げて來たのであつた。そこで吾々民族は再びこの專制王國より自己の自由を護る爲に、戦をなさなければならなくなつて來た。

この宗教革命より政治革命の突發するまで、凡よ三百年間、新聞紙は、この民族國家の嚴重なる監督の爲に馴れせられ、官報として利用され、經濟的記事に社會的記事に、政府當局の鼻息を窺ふて、その發達を計るに務めて來たに過ぎなかつた。

先づ獨逸に於いて、宗教革命に依る三十年戰爭は、新聞紙の需要を増大して、その數は二十を越え、従つてその勢力も、次第に侮る可からざるものとなつて來た。又英吉利に於いて、この新聞の勢力を知り、且つそれを利用した者に、エリザベス女王の宰相ブルレーイーがあり、彼は新聞の偉力を信じて、一擱みの事實が、能く帽子に一ぱいの風評に相當すると云つてゐた。當時即ち一五八八年、西班牙の必勝艦隊が百二十九隻の軍艦と、二萬の兵卒と一萬の水兵とを以て、一擧に英國を征服せんとしてゐた際であつて、彼は日々その事實を手記新聞として公布し、その恐慌を鎮靜せしめたのであつた。

この奏效によつて、當局は益々新聞の等閑に附すべからざるを悟つて來た。一五八九年より一六四一年即ち長期議會に入るまでの間、所謂星塵によつて、國內の政情を發表すると云ふことは、王の大權に屬するものとして、民間に於ける新聞紙の發行及びその内容が嚴重なる監督

と檢閲とを受けねばならなかつた。それ故に英吉利の政情をば報道する爲に、對岸たる和蘭のアムステルダムに於いて、一六二〇年十二月二日に英語を以て無表題の一枚新聞が、出されるに至つたのであつた。

これより先、一六一三年ジョン・ライトは、倫敦に於いて「リポータア」を出し、一六二二年八月二日ナザニール・バターは、「週刊ニュース」を出し、主として獨逸に於ける戰爭の記事を載せて、以て國內の政情を報道することを避けてゐた。彼は一六三八年にセント・ポールの寺院修繕費として年十磅を獻金することにより、ニュースの獨占權を得、一六四一年星塵が廢止せられて、長期議會に入るや、議會の議事を報道することの出来る免許を得て、活躍したのである。けれどもそれは常に政府と教會との意を迎ふるに勉めてゐた。又一六八五年に政府の命令によつて出されたる「倫敦ガゼット」も、その發行回數を一週月曜日と木曜日との二回に進めて來たにも拘らず、その内容は單なるニュースの報告に止まつてゐたのである。

然るにこの腐敗せる王政と頽廢せる教會とを攻撃して、今迄虐げられたる平民の爲に萬丈の氣焰をあげた者は、吾がミルトンであつた。彼は有名なる「バラダイス・ロースト」の著作者

として、吾々に記憶せられてゐるけれども、彼は他面に於いてクロームの秘書であり、又ジャーナリストとして、民権發達の爲に奮闘したのである。そして彼によつて出されたる無数のパンフレットは、主として政治に關係し、後世新聞に於ける論説の先驅をなして來たのであつた。

* Bucher, Die Entstehung der Volkswirtschaft, S. 239.

** Lord, The Young Man and Journalism, PP. 200-1.

*** それを紐育大學新聞學科長 James Melvin Lee 博士が、新聞の始であるとしてゐる。

**** Warren, Journalism, P. 21.

X

更にこの民権發達の爲に奮闘せし者を見んとするならば、本國より堪へざる壓迫を蒙つてゐた、米國の十三州に眸を轉ぜねばならぬ。米國に於いてはポストンの郵便局長たるキヤンベルによつて、一七〇四年四月二十四日に、米國最初の新聞として「ポストン・ニュース・レター」が出され、一七一九年十二月二十二日より「ポストン・ガゼット」が發行され、一七二〇年一月

より「ニュー・イングランド・クーラント」が販賣せられた。そしてそれは多く外國新聞の翻譯轉載を以て満足してゐたのであつた。

然しながら一七二九年の十月に至つてベンチャミン・フランクリンが、ヒラデルフィヤに於いて「ペンシルヴァニア・ガゼット」を經營し出して來た。彼は新聞紙に廣告を載せ、新聞記者を養成し、十三州の團結を鼓吹し、英國の印紙條令に反對の狼煙をあげ、この苛政に對して革命の起らざる可からざるを論じ、獨立自治の精神を高調し、自ら護民官を以て任じ、民衆の自由の爲に Palladium (守護神) たらんことを自負してゐた。だから彼の筆端によつて、如何に清教徒はその若き赤き血に自由憧憬の波をば打たしてゐたか？ 徳孤ならず、彼の感化によつて、ジョン・ピーター・ゼンジャーは、「紐育ガゼット」に據つて以て言論の自由を叫び、熱烈なる民権愛の宣傳をなし、所謂米國精神を築き上げて來たのである。獨立戦争、それは實にこの護民の精神によつて、充されたる新聞によつて、鼓舞せられたものであると云ふも、それは決して過言であるとは言ひ得ない。

再び吾々がその革命を追ふて、眸を歐洲大陸に轉ずるならば、そこに佛蘭西大革命に先立つ

て、行はれた所の思想革命に於ける、新聞紙の活躍を見なければならぬ。佛蘭西革命は、一方英國崇拜熱による革新文學の普及により米國の獨立運動に際して、佛蘭西の援助を得んが爲に來佛した、ベンチヤミン・フランクリンの一行が盛に自由平等自主を鼓吹した事によつて、思想的洗禮を受けたのに始まると云はなければならぬ。

由來、佛蘭西の新聞は、個人的色調を濃厚に有し、且つそれは營利的でなく、自己の主張をなす爲の機關として考へられて來た。従つてそれはニュースよりも論説を主としてゐる。一六三一年ルノードが、「ガゼット・フランス」を出し、マザランが、「マザラン」を發行した當時より、現今に及んでゐる特長である。故にこの新聞が大革命當時に於いては、極端なる壓迫の下にあつても、その主張をなすことを等閑にはしなかつた。又それは多く一面刷の一枚新聞であり、ニュースを載せることなく、廣告を集める必要がないのであるから、少しの金を有し、政治上の意見を有する者は誰でも明日から新聞を發行することが出來たのであつた。従つてその数は無數に上り、普通は三號四號にて終りをつけたにも拘らず、後より後より接續して發行せられ、この新聞紙を通して發表せられたる革命的思想は、そこに有力なる輿論を作り出すに、

役立つて來たのであつた。

尙この護民期に於ける新聞紙をば、和蘭及び獨逸の自由都市に於いて發見することが出來、又露國に於いてはニコラス・システムによつて踏み躪られながらも、自由へと伸上らんとする民心に、幾多の希望を與へ、日本に於いては、明治六・七年の「報知」及び「朝野」に、確にその面影を窺ふことが出来る。

* Park, The Natural History of the Newspaper, P. 276.

** Lee, A History of American Journalism, Pp. 29—31.

*** Lee, ibid., Pp. 75—8.

**** Bucher, Industrial Evolution, P. 242. 摘録「ユルクスの生涯とその思想體系」(個人雜誌「社會學評論」第三・四號、二六頁)。

X

この護民期に次いで當然やつて來るものは、政黨の爲に互に輿論を賣る所の政争期の新聞で

ある。何故ならば民衆の獨立が確保され、その自由が伸長せられて来るに従つて、その政治は必ず立憲政治であるか、又は民主政治である。この政治組織に於いて輿論は重大なる地歩を占め、偉大なる力を振ふて来る。そしてこの輿論を集め得たる者が、その政權を握り得る時代に進展して来たのである。そして第一に、その政權を握り得たる者、それは今まで民權保護の爲に活躍した者に外ならない。

彼等が一旦政權を得るやその新聞によつて、自己の主張と抱負とを、民衆に宣傳せんとし、又それより後、新聞を経営する者も、多くは政黨に關係を附けて、その保護の下に立たんとし政黨も亦機關新聞なくしては、立ち得ない世運となつて来た。そこに民權保護を以て任じて来たジャーナリストは變じて政黨に媚を賣り、民衆の煽動を業とするデマゴグとなつて来た。そしてそれが爲に新聞紙は、一般に輿論の機關であると考へられ、進んでは新聞紙それ自らが輿論の代表者であると云はれてゐるにも拘らず、それは全くの錯誤であり、誤認であると云はざるを得なくなつた。而もこの事實は既に羅馬帝國の初期に於いて、伊太利の歴史家フェリローが所謂輿論の機關即ち新聞とは常に二三の黨人の意見を永久にする作用を有するに過ぎないと

云つてゐる如く、黨人は民衆が自分自身で考へると云ふことを恐れ、さうやらしてはならぬと考へてゐる。従つて新聞紙は自己の屬する政黨の爲に民衆を利用せんとし、民衆の意見を統制する爲に、殊更に事實を誤傳し、少くとも不正なる誇張をなし、或は正確に判明した事實は、これに加ふるに誤つた註解を附して、以て民衆を裏切るに至つたのであつた。

* 摘稿「輿論と宣傳との社會學的考察」(最近社會學の進歩)二三三—八〇頁。

** Hart, Community Organization, Pp. 133—4

x

そして吾々は、この過程を、各國の新聞史に於いて見出すことが出来る。英國に於いては一七〇三年三月十一日、日刊新聞として初めて「デイリー・クーラント」が現れ、一七〇五年八月一日、夕刊新聞として、又初めて「イーヴニング・ポスト」が發行されて来た。けれどもこれ等の新聞は、一枚片面の小新聞であつて、編輯者はそれによつて自己の意見や解釋を讀者に與へようと試みもしなければ、又與へ得るには餘りにその紙面が狭小であつた。唯讀者はその新聞

が與へる簡單なるニュースによつて、彼等自身で考へるに充分なる資料を、掘み得れば幸であつた。然るにダニエル・デフォウによつて、「レビュー」が出され、リチャード・ステールによつて「タアテラー」が印刷され、更に進んでステールとジョセフ・アデイソンによつて、「スペクテイター」が発行され、こゝに紙面は擴大され、そしてそれは兩面刷となり、現今の新聞紙の如き體裁を備へて來たのであつた。

この紙面を擴大して現今の如き體裁を備へて來ると云ふことは、そこに當然多大の資本を必要とする。そして新聞がその購読料によつて維持される迄には、未だ社會は進歩してゐなかつた。又廣告料によつて、それが支持せられて行くと云ふ世界は、遙に遠き將來に屬してゐて、今日の如く寧ろ新聞經營者の收入の最大部分を形成するなどは、夢想だにも出來得なかつた。こゝに新聞經營者は勢ひ他に適當なる財源を求めねばならない、この經濟的理由と、護民期よりの歴史的性情とによつて政黨の補助を求め、その御用を務め出して來たのであつた。英國に於ける護民期のパンフレットをこの政争に應用した者は、チャールズ二世の末年に活躍した、サー・ローチヤー・レストランジュであつた。

彼は意見のみを記載して、ニュースをば載せない「オブザーヴァー」を出し、トーリー黨の爲にパンフレット掛を動めたのであつた。彼は一寸の間に政黨の命によつて、パンフレットを作り、彼自身が當時印刷局の檢閲官でありながら、民權黨たるホイグ黨と新教徒とを極力攻撃し、その功績によつて、サーの爵位を得るに至つた。然るに一七〇〇年より政府は今迄なして來た、反對黨の新聞に對する嚴重なる干渉を緩和した。この機會に於いてレストランジュのなした行動の反動として、前記の如くデフォウ、ステール、アデイソンを初めとして、スウィフトの「エクザミナー」及びジョンソン博士の「ラムプラー」等の發行となり、一七三三年には倫敦に於いて、十一の新聞紙が互にその立場によつて、論争を事とするに至つたのであつた。殊に十七世紀より十八世紀に入るに際して、政黨内閣の出現となり、益々その政黨機關新聞が政争上強大なる武器となつて來た。何故ならば政黨が掌握するには、先づ選舉戦によつて、勝を占めなければならぬ、選舉戦に於いて勝を占めると云ふことは、選舉の勝敗が多く民衆の有する先行的判斷によつて、左右せられてゐる所から、民衆に善良なる印象を與へて置かなければならぬと云ふことが、その前提條件とならざるを得ない。そしてそれにはどうし

ても新聞紙を以て、常々自黨の爲にする宣傳が必要となつて来る。この必要の爲に既に一七三二年より一七四二年の十年間に於いて、ワルポール内閣は、フリーブリトン、デーリー・クローラント、ガゼッティア及び其他の機關紙の爲に約五萬七千七百七十磅の公金を支出したのであつた。然るに十八世紀の後半期に入つて、多くの日刊新聞紙が出され、殊にウイルケスは、ノース・ブリトンに據り、その尖鋭なる筆鋒を以て、一七六三年四月に、時の總理大臣ピニートを以てその職を辭するの已むなきに至らしめたのであつた。この事實は社會の注意を新聞紙に集中せしめ、一七七二年新聞記者は、その職掌により議會の傍聴權を獲得し、益々新聞紙の偉力を政治社會に示して來たのであつた。斯くして一七七六年にはその數實に五十三に昇り、一七八五年には當時有數なるジャーナリストを集めて、「タイムズ」が発行せられるに至つたのであつた。而も彼等の多くは尙依然として常に政黨と密接なる關係を有し、言論の力により如何にして、他黨の勢力を削ぐかに腐心して來たのであつた。

* Warren, Journalism, P. 33.

** Lord, The Yung Man and Journalism, Pp. 205—7.

*** Kent, The Game of Politics, P. 205.

**** Warren, ibid., P. 37.

***** Lord, ibid., P. 207; London Times 及び Lord Chancellor Brougham, Cardinal Newman, Lord Grey, Lord Macanley, Sir William Harcourt, Moore Dean Stanley, Lord Sherbrook, Dr. Groley 等が據つてゐた。

x

又、米國はその議會政治と、その政黨組織と、その機關新聞制度とを、英國から傳承して來たのであつた。今、その源流に溯れば、獨立戰爭當時、英國軍が紐育市に侵入し、そこで彼等が彼等の利益を支持する爲めに宣傳機關として、アンブローズ・セルレーが出した所の「紐育ガゼット」があり、そして最も模範的のものを求むる時には、奴隸解放の爲に奮闘したるホラス・グリーンレーが機大の筆を呵したる「紐育トリビュン」がある。それはチャールズ・フランセス・アダムスによつて、「紐育トリビュン」は、その當時に於いて經濟的にも道德的に

も、この國に未だ曾て見ざる程、最大なる教育的原動力である」と云はれたがやうに、實に立派なる護民的機能を有してゐたと共に、北部諸州の政見を代表し高調するものであつた。けれども吾々はこの南北戦争に先立つて、政争期の特長を最もよく現してゐるだけ、それだけ醜惡なる出来事を思出し得るのである。そしてそれは一七九一年の暮、フェデラル黨對レパブリカ黨の軋轢であり、ハミルトン對ジェファソン、フェノー對フルノーの論戦であり、ゼガゼット・オブ・ユナイテッド・ステーツ對ゼ・ナショナル・ガゼットの論争であつて、痛罵に加ふるに痛罵を以てし、人身攻撃に重なるに人身攻撃を以てしたのであつた。新しくして地方の新聞紙もこの政争の渦中に投ぜられ、政黨新聞は次第にその枝葉を延して、今日に至つたのである。

吾々は先づ紐育市に於いて、デモクラット黨に屬する「紐育ワールド」と「紐育ジャーナリカン」の二大新聞を發見することが出来る。又これと同時に、地方新聞の七割五分はレパブリカン黨に屬し、他の二割五分はデモクラット黨に歸屬してゐる情勢によつても、如何にそれが政争の爲に利用せられてゐるかを、推知することが出来る。

* Park, The National History of Newspaper, P. 281-2.

** Lee, A History of American Journalism, P. 122.

*** Kent, The Game of Politics, P. 210.

x

佛蘭西に於いては、又、この傾向のより甚しきものを見なければならぬ。佛蘭西の新聞は巴里の新聞であるといひ、又巴里は新聞の都であるとも云ひ得る程、即ち佛蘭西の新聞雑誌はその七割を巴里に於いて發行してゐるのである。この現象は巴里に新聞紙の過剰生産を來さしめて來た、然るに新聞紙は、勞働力と同じく極端なる腐敗性を有してゐるから、過剰生産はそこに必ず企業者に損失を招かねばならない。この損失は一方それがニュースに重きを置かず、論文と小説とを以て編輯せられてゐる事によつて、減少し得るとしても、他方佛蘭西新聞紙の特長として、廣告に重きを置かざる結果、やはり莫大なる損失をば日々生ぜざるを得ない。そしてこの損失は多く政黨の機關紙たることにより、又は政界巨頭の機關紙たることによつて、政敵を攻撃し、彼等の抱負を民衆に公布することによつて、支辨せられてゐるのである。故に

吾々は佛蘭西の政争期に於いて、オルレアン黨の「ル・ゴローア」、ル・モニツール・ユニヴェルサル、及び「ソレイユ」を見、ナポレオン黨の「ロトリテ」、フランゼー黨の「ラントランジャン」を読むことが出来る。又個人に属するものとして、フェリーの「シスタフエット」、ガソベッタの「ラ・レパブリック・フランセー」、エブラールの「ル・タン」、クレマンソーの「ヂュヌチス」を挙げ得るのである。

却説、吾々が歩を轉じて獨逸の政争期を見んとするならば、先づビスマルクの新聞政策を見なければならぬ。彼は曾て佛蘭西の政治家を嘲笑して、「政治家の能力は、輿論を作り、輿論を指導し、輿論を實現するにある、そしてそれは新聞と教會と學校とを操縱することではなからぬ。然るに佛蘭西の政治家に、この能力を有する者を一人として見出し得ない」と公言してゐるだけ、彼は大膽に新聞を操縱して來たのであつた。彼は巧に新聞を脅迫し又巧にそれを籠絡して、自己の機關となし、自己の走狗たらしめ、只管彼の政策を服膺するものと變形したのであつた。即ち吾々はビスマルクの機關新聞として、「アルゲマイネ・ツァイツング」、「ナチヨナル・ツァイツング」、「バチシエランデス・ツァイツング」、「ドレスドネル・ナハリヒテン」及

び「シユニーピシユ・メルクウル」をあげ、これに對してビスマルクの政敵たるリヒテルの有する「フライジニイゲ・ツァイツング」をあげることが出来る。リヒテルは急進黨に屬し、急進黨は猶「ベルリネル・タアゲブラット」を有してゐる。そして保守黨は、「北獨逸・アルゲマイネ・ツァイツング」及び「クロイツ・ツァイツング」を有し、共和黨は、「フンクフルテル・ツァイツング」を出し、社會黨は、「フォルウエルツ」、「フォルクス・ツァイツング」及び「ノオイエ・ツァイト」等を發行して、各々その主義主張の貫徹を期したのであつた。

* Watkins, An Introduction to the Study of Labor Problems, P. 93.

X

又、我國に於いても、この政争期を明治七八年より明治二十年前後に互つて、發見すること出来る。そして其極盛期即ち明治十五年の中頃には、帝政黨の福地源一郎は東京日日新聞に據り、丸山作樂は明治日報にその陣を構へ、これに對して改進黨は矢野文雄・箕浦勝人・犬養毅及び尾崎行雄をして報知に、成島柳北を朝野に、沼間守一・島田三郎を東京横濱毎日に據ら

しめ、自由黨は馬場辰猪・中江篤介・田口卯吉をして、自由新聞を發行せしめ、以てその論策の陣を張らしめたのであつた。

政争に狂奔する者は、他を顧る暇を有してゐない。鹿を追ふ者は、山を見ざるが如く、政黨の機關新聞紙は政敵本位であり、讀者の要望を重視しなかつた。且つ彼等は今日、猶地方に多く散在する政黨臭味の甚しき小新聞のその如く、消極を感ずるまでに、自己政黨の爲に曲筆した。こゝに讀者はその何れが真相であり、何れが事實なるやの判断に苦しまるを得なくなつた。即ち讀者は新聞を購讀する目的をば全く裏切られ、その偏見に反感を感じて、遂にその購讀をば休止する。然るに新聞紙は廣く購讀せらるゝことによつて、力を有するものであるが故に、この次第に無力となりつゝある新聞の爲に、政黨はその企業危険の分前を、負擔すべき合棒となることを忌避し出し、そして政争期の當然迎る可き過程に達着して來たのであつた。

* 松本君平「新聞學」二七二—八二頁。

** Bucher, Industrial Evolution, PP. 240—2.

x

前節に於けるが如く多くの新聞が、政黨の機關新聞として、その記事の信用を失墜して來ると、こゝに讀者の歡心を迎へるが爲に、その記事を選択して再び國民の利益の爲に筆を呵する所の自由新聞紙又は獨立新聞紙が生れて來たのであつた。然しながらこの新聞紙と眞に述べた所の護民期のそれとを區別して考へねばならぬ。何故ならば護民期のそれは、護民の爲の護民であるのに反して、獨立新聞紙の護民運動は人氣取りの手段であり、營利の目的であるからである、故にそれは既に營利期に屬するものとして、取扱はるべきである。

この獨立新聞紙の出現に對して、先づ吾々はその背景をなしてゐる所の政治革命と産業革命とを考へなければならぬ。この政治革命によつて人類は自己の人權に目覺めて來た。彼等はそれを佛蘭西に於いて、人は出生及び生存に於いて自由及び平等の權利を有す、と呼び、米國に於いては、凡ての人は自然に於いて平等に自由に且つ獨立にして或先天の權利を有す、と宣言し、日本に於いては、福澤諭吉をして天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり、

されば天より人を生ずるには萬人は皆同じ位にて生れながら貴賤上下の差別なし、と説かしめたのである。

こゝに自己の平等価値を發見した民衆は、その智の有無即ち學の有無によつて、貴人にもなり、下人にもなつて、その有様雲と泥との相違となり、天賦の自由と獨立とが失はれて來ることと氣附き、どうしても教育によつて、その平等の力を得んことを要望し、そしてそこに教育が普及される。教育の普及は必然新聞紙の購讀力を増大し、購讀力の増大は、新聞紙の大量生産を要求し、大量生産は生産費を節約して利益をあげ、今や政黨の援助なくして、相當に營利的企業となる可能性を具有して來たのである。

又、他方に於いて、産業革命は人力生産に代へるに機械生産を以てし、世の生産力を四千四百倍し、多數の労働者を使用し、大工場を立て、新聞紙の大量生産を敢行せしめて來たのである。而も時代の進運に伴ふて十九世紀の後半期より新式印刷機の發明と、その發達とにより、三十五頁以上のものを一時間を出でずして三萬部以上を印刷し、ステロ版印刷の發明となり、更に植字機の發明利用となつて來た。こゝに新聞紙はどうしても更に大資本を必要とし、他の

企業と同じく當然資本家の手に落ちて行かなければならなくなつて來た。

* Rousseau, Du Contrat social, P. 6.

** 藤澤諭吉・小幡篤次郎共著「學問ノス、メ」初編一―二頁。

*** 拙稿「産業革命の社會史的考察」(「經濟及商業」第二卷第四號、八四頁)。

**** Lord, The Young Man and Journalism, Pp. 208—9.

x

この企業が斯くして一旦大資本家の手に移り行くや、彼等はそこに猛烈なる競争を行ひ、他の小規模なる新聞紙の顧客を蠶食して益々大となり、世界に起る色々の出來事を隣りに起きし出來事の如く、二三時間の内に知る爲に、電信電話を私設し或は専有し、多數の特派員を世界の各所に送り、數種の地方版を出し、單に政治・經濟・教化に關する記事のみならず、進んで婦人子供の爲に欄を設け、寫眞を入れ漫畫を載せ、小説・講談・考へ物より、醫學・衛生・法律家事及び身上等の相談にも應じて來た。即ち新聞紙は社會的活動の指針であると共に、併せて娛

樂を興へんと試みられて来たのであつた。そして若しグラスゴー市に於いて、朝、労働者が電車内に腰を下して、その日の新聞を読むことが出来なかつた時には、市長はその責任を負はねばならぬ、と云はれてゐるのは、何等異とするに足らぬまでになつて来た。

新しく又新聞紙は全く商品となつた。加之用紙の暴落と販路の擴大とは、その頁数が四頁より八頁となり、八頁より二十頁或は二十四頁となり、遂には三十六頁或は四十頁となつて来たにも拘らず、その定價を下落せしめ、定價の下落は、一層一般民衆をして、新聞紙を購読せしめ、その發行高は日に日に増大して来た。こゝに又新聞紙は政府當局の公告に使用され始め、十九世紀の四分の一上半期より盛に私用の廣告、殊に商業用の廣告に利用されて来た。故に新聞社は一方購読料と他方廣告料とによつて巨利を博し、而も彼等をして、自由獨立なる新聞と誇稱せしむるに至つたのであつた。

* Bogardus, Introduction to Sociology, P. 264.

* * Lee, A History of American Journalism PP. 346.

x

却説、吾々は英國に於いて、この獨立新聞紙を、一七七二年に創刊されたる「モーニング・ポスト」に於いて見、續いて「タイムズ」、「モーニング・アドヴァイザー」に於いて見ることが出来る。殊に一八五〇年、一錢新聞を以て自負し、中産階級の利益を代表すると自任する「デリー・テレグラフ」に於いて、その模範的のものを發見し得るのである。又、米國に於いては、漫畫家トーマス・ナストの活躍する「紐約タイムズ」があり、上流社會を顧客とする「紐約ヘラルド」があり、一八三三年ベンチヤミン・ヘンリー・テイナによつて發刊されたる、一錢新聞の「サン」があり、「サターデー・イヴニング・ポスト」がある。更に吾々は佛蘭西に於いて、「ル・ヒガロ」、一錢新聞の「ル・ブチー・ジャーナル」を挙げ、獨逸に於いては、經濟新聞たる「ベルゼンコウリエル」及び「ハンブルグ・コレスポンデント」を數へ、日本に於いては、獨立獨歩を吹聴した福澤諭吉の「時事新報」を見出すことが出来る。

然しながらこの獨立新聞紙の發達するに伴ふて、他の政黨機關紙もその政黨より離れて、大

資本家の手に歸し、こゝに新聞紙は勢ひ大資本家より、三重の統制を受けねばならなくなつて来た。即ち政黨より獨立せしむる原因が更に資本家の掣肘を受けしむる原因となつて来たのである。然らばこの三重の統制とは何であるか？ それは第一にはより多く購讀者を得る爲に、第二にはより多くの廣告主を得る爲に、第三には自己階級の利益の爲に、記事の上に加へられる掣肘である。

先づ購讀者の増大を望むと云ふことは、企業者の當然である。購讀者の多數であると云ふことは、それ自身に於いて、多大の利益を收め得るばかりでなく、廣告料を騰貴せしめ得るからである。彼等はこゝにあらゆる手段を講じて、購讀者を食食しようとする。そしてこの目的を達する爲には、讀者の注意を絶えず惹きつけて置く必要がある。

然るに現代社會は二大階級に分裂してゐて、閑散階級は無爲徒食、只管強烈なる刺戟を求めてやまず、労働者階級も亦日々の労働に疲憊して、殊に疎然たる刺戟でなければ、その注意を喚起し得なくなつて来た。こゝにリップマンの云ふが如く、その日の生活に利害關係を有する平凡なる記事よりも卑俗・淫猥・残忍・獵奇的なる記事を誇大的に感性的に掲載して、世俗に媚

び時流に投合せんと、滔々相競ふて遅れざることを冀ふ有様となつて来た。

故に又彼等は記事を製造し、或は故意に記事を作りあげて、その購讀を強制し、以て時間を空費せしめ、徒らにその神經を過敏とならしめ、而もその爲に重要なニュースの報道を省略するのである。全く彼等はダイナの嘲りしが如く、黄色新聞紙に墮了せざればやまさるものとなつたのである。

* Cooley, Social Organization, P. 270.

* Park, The Natural History of the Newspaper, P. 285.

*** 韓星と地球との衝突あるべしと報じ、歐洲大戦中獨帝の死を報じ、發狂を報じ、レーニンの死を屢々報じ、チャプリンの訪日を度々報じ、又新聞社にて諸種の事業を企畫し、故意に記事を製造して、日々その紙面の大部分を埋め、そして新聞紙面の社會性を侵害して来たのであつた。

x

第二に廣告より来る収入が新聞企業の収入の中に於いて、約三分の二以上を占め、廣告の多

少はその新聞の死命を制してゐる。従つて廣告主の意向を編輯者は尊重し、或はそれを推測して、反感を買はざるに努め、更に進んでは廣告主を辯護し、その利便を計つて來るのである。然るに黄色新聞の代表者と目されてゐる「紐育フィールド」の營業主任ドン・シ・シーズは、廣告主の意見は偉大なる編輯者又は大新聞に影響を與ふるものではないと壯語してゐる。けれどもそれは又外部に對する壯語に過ぎないのであつて、如何に無力なる編輯者も、小規模なる新聞も、吾々は廣告主の意見を迎へる爲に、自由にそのニュースを改竄すると公言する者はない。何故ならば彼等は毎に事實をそのままに報道せざるやうに、慣習づけられてゐるからである。そして實際に於いてウォードの云ふが如く、どの有名なる新聞紙も或利益の辯護者であり、そして報道せられる總てのニュースは、間接に或は直接に——間接の場合は却つて、その効果をあげ得るが——その利益を支持する所の組織的購着に役立つて來るのである。吾々は今、こゝに彼等の釋明する所に従つて、よし讓歩するとしても、廣告主はその廣告に於いて、如何に横暴に新聞紙の體面を蹂躪してゐるかの例證をあげることが出来る。而も彼等は其廣告料の爲にその蹂躪に甘んじてゐることによつて、如何にそれが有力なる統制であるかを、充分に推知する

ことが出来る。

第三の軼材は、大資本家が新聞事業に投資し、その株主となり、その社長となり、又は重役となつて、雇人たる記者に向つてなす軼材である。この軼材に就いては既にジョン・スウィントンの言葉を借りて述べたが如く、その壓迫に屈從して新聞紙を製ると云ふことは、それは一種の犯罪である、いやそれは鐵面皮でなければ到底やり得ぬ仕事である。新聞記者、その男は月給と同時にその袋の中に鐵面皮が封入せられてゐるのを手にせねばならぬ、彼等の有する立派な身體を一山いくらで賣り、處女の如き希望は、大きな淫賣屋——新聞社——で裏切られねばならない。吾々は最早この營利を盲信する黄色新聞に満足すべきではない、それは吾々の眞に求めてゐた新聞紙ではなかつた。そしてそれは資本主義より生れて來た妖魔であり、吾々はそれからどうしても遁れねばならない。若しそれが一日遅れる時には、吾々は爲に一日々々と窒息して行くことであらう。

* Lee, A History of American Journalism, P. 430.

** Dealey and Ward, Text-Book of Sociology, P. 251.

X

近世資本主義の高調せらるゝにつれて、資本家階級は益々無援の労働者を虐げて、その企業を独占し、より過大なる利潤を搾取して来た。そして労働者はこの虐げられたことによつて、そこに階級意識を醸成せざるを得ない。この労働者が階級意識に目覚めて来ると云ふことは、反対に資本家階級をして、又階級意識を更に強めしむるに役立ち、斯くしてそれは剛ゴツことなり、その階級意識の險悪さを次第に増し、従つて階級的偏見を分化し、そしてそれは兩階級の間常に敵意を相抱かしむるやうになつて来た。

労働者は一個人としては無力である。一個人としては、彼等はたゞ資本家の爲に、自由に驅使せられる常備軍であつたり、又は豫備軍であつたりするに過ぎない。彼等は團結によつてその力を發見する、そして彼等がその社會に於いて正當なる地歩を確保するには、團結の力による外はないと考へて来る。而もそれは全世界に亙つて鞏固なる團結を作るにあると考へて来た

のである。この團結を作り、それを鞏固にし階級意識を鮮明となし、共通なる利害の感じを分掌するには、どうしても彼等相互の間に重要なニュースを報告し、思想を交換する手段を持たなければならぬ。そして今、彼等はそれを持つてゐるかを自ら考へて来た。

彼等労働者は確にそれを持つてゐない。彼等の持ち得るものは、資本家によつて独占せられ且れ汚染せられてゐる新聞紙があるのみである。そしてそれは資本家階級の偏見によつて左右せられてゐて、その記事は悉く彼等労働者階級に取つて、害あつて益なき黄色味を濃厚にするものである。茲に彼等労働者階級は先づ自個の機關を資本家の手より獨立して持たなければならぬ、然し彼等の多くは無産であり、現今資本家の經營する如き大規模の新聞紙に到底對抗し得ない。そこに彼等の有し得るものは、原始的なる新聞の口頭新聞であり、落書であり、手記新聞であり、謄寫版新聞であり、パンフレットである。然し彼等はそれで満足し得ない、のみならず資本家は、巨萬の發行高を有する新聞紙を、日々社會に流出して、このパンフレットを抹殺して了ふ。こゝに彼等労働者は、自己階級の利益を保護し、團結する爲には、資本家の經營する大新聞に匹敵する、彼等の大新聞を持たねばならぬと考へ、それによつて資本家階級の

スモークスクリンをば打破して、自己の世界を築きあげやうとする。だから彼等の考ふる所は明かに營利期の新聞に對する獨立的企圖である。

この企圖として考へられるものに、労働組合の機關新聞があり、又は社會主義者或は社會黨の機關新聞がある。然しそれは必ず又機關新聞としての弊に墮したる。それは資本家階級を毒するのみならず。遂には却つて労働者階級をも事實と真相とから遠ざけて、社會が新聞に期待した處を真切つて來るのである。ここに吾々は等しくこの營利期にある新聞を如何にすべきかに迷はざるを得なし。

* Hobson, The Evolution of Modern Capitalism, P. 188; Sidney Webb, Problems of Modern Industry, P. 139.

** Cole, Chaos and Order in Industry, P. 2.

*** Watkins, An Introduction to the Study of Labor Problems, PP. 355—7.

**** Ross, Social Psychology, P. 86.

***** Ray, An Introduction to Political Parties and Practical Politics, P. 86; (米國では社會主義者の

新聞は日刊で九つある、内三つが英語で、六つが外國語である。そして New York Call と Chicago Daily Socialist とが、その主なるものである。それに週刊が七十、内四十が英語で、三十が外國語である。

x

却説、私は新しく新聞の社會史的過程を略観して來ると、そこに新聞紙が社會に存在し得る根據、即ち社會的職能、即ちその本質をば掴み得たと思はれる。そしてそれは社會そのもの、近狀をば、社會の成員に廣く且つ素直に理解せしむる手段であると云ふことである。若し新聞がこの職能を裏切る時には必ず遠からず没落し、その職能を充してゐる時には必ず存続する。ポールドスが新聞記事は、事實に立脚せねばならぬ、と特に斷つてゐるのは、この理由からである。

實際、新聞紙は時代の鏡であり、民衆の鏡であらねばならぬ。そしてそれは事實を吾々に與へ、吾々自らをして自由に考慮せしめ、判斷せしむるものでなければならぬ。決してそれは

偏見を以て充されたる判断を押し、思想的 *rapina* をなすものであつてはならぬ。然るに吾々は前述の如く、營利期に於いて資本家階級より遺憾なくその社會の實状を知る所の機會を掠奪されてゐる。そして又その反動期に入込むならば、労働者階級によつて再びその手段が剝奪されんとする情勢を呈してゐる。而も新聞紙をこの現状より救済する方法が問はれた時に、パークの如く、「そこに如何なる救済方法もない」と答へんとする多くの者があるのみである。

今、私はこゝにパークの所論を考へて見る。パークは次の如く云つてゐる。

「……新聞紙の現状に對して、如何なる救済方法があるか？ そこには何等の救済方法もない。親切に云ふならば、現代の新聞紙は、彼等があり得る上々のものであるからである。若し新聞紙が改良されるべきであるならば、それは民衆を教育すること、政治上の報道及び知識を組織することによつてのみ可能である。リップマンが能くも云ふたやうに、——今、記録されてゐる社會現象の数は少い、その上それを分析する道具は甚だ粗雑であり、従つてその概念は時として曖昧であり、未だ批判されてゐないものである。——故に先づ吾々は、吾々の記録から改善せねばならぬ。そしてそれは又大變な仕事である。然し第一に吾々は、政治的社會的生活を客

觀的に見る事を學び、それを悉く道徳上の術語、例へば善だとか悪だとかと考へることを中止せねばならぬ。その場合に初めて吾々は、今より少いニュースを得るけれども、そこによりよい新聞紙を發見するであらう。」

と。一言にして云ふならば、新聞紙の類廢は民衆が社會科學的に自覺せざるにある、と云ふのである。成程それは、それに違ひない。

* Helfferich, *Das Geld*, 1923, S. 259—60.

** Bogardus, *Introduction of Sociology*, P. 263.

*** Lee, *A History of American Journalism*, P. 429.

**** Park, *The Natural History of the Newspaper*, P. 289.

x

然し新聞紙の民衆の上に及ぼす教化的影響は決して僅少ではない。又屢々曩にも述べしが如く、吾々は最早新聞紙なくして、その社會生活をなすことが出来ないまでに變化されて來た。

猶その上新聞事業は、巨萬の資本を必要とすることによつて、資本家階級の獨占事業となつて了つてゐる今日、現代の新聞紙をば、「彼等があり得る上々のものである」となし、翻つて民衆の自覺を俟つとしても何によつて民衆を自覺せしめんとするか、取るべき如何なる手段が、そこに残されてゐるか？ 假令残されてゐても、それは新聞紙に對して餘りに微力であることを悲しまねばならぬ。

従つてバークと同じく、ホワイトローリエードが、「新聞が悪くなつて行くと云ふことは、人々が悪くなつて行くと云ふことである」と考へ、アーサー・トウイング・ハドリーが、「若し吾々が新聞紙に責任を負はせやうとするならば、先づそれは讀者自身から改造せねばならぬ、何故ならば新聞編輯者は、人々の要求する新聞を作るのであるからである。それ故にその責任の大部分は、當然そのニュースを買つて讀む所の公衆が負ふ可きである」と考へるのは、極度のアルコール中毒患者に向つて、酒を飲み始めたのがそも／＼事の起りである以上、酒を販賣せし者に何等の責任はない、若しその酒が有毒であると思ふならば、飲酒を中止するまでの事であると、公言するのと同様の考へ方であると思ふ。

吾々は生存の必要上六を求めた、さうすると、この水を多く賣らんが爲に、人性の弱點に乘じて、少量の酒を割り始めた者は誰であるか？ 斯くしてその酒の量を増し、總ての水を酒と化し、以てアルコール中毒に陥し、さては今自ら井戸を掘り水を求めよ、と云ふに相似たる論理ではないか？

吾々は自己の生活する社會を精確に、——何等の誇張もなく、又何等そのニュースの選擇に偏見を差挟むことなく、——吾々に報道する鏡を求めてゐるのである。嘗てシヨールペンハノールが、「新聞紙は壁に映る影である」と云つてゐるがごとく、それは影の如く曖昧であつてはならぬ。そしてその鏡の面には凹凸があつてはならぬ、この安鏡を抱いて、如何にその面に白粉を塗抹するとも、それは詮無き事であるからである。先づ吾々はどうしてもこの凹凸を磨して平面とするの術を考へて見なければならぬ。

* Lee, A History of American Journalism, P. 429.

X

そこに新聞記事を監督する法律と機関とを、現存するものより、厳にし、且つその記事の當否をも調査せんとする者がある。ジー・エム・ベネットは、「眞實なる出版法は、それが直接であつても間接であつても、眞相を侵害した時には、その報道は犯罪たる可しと規定するものでなければならぬ。一方誰でも、その眞相が侵害されたと考へる者は、その犯罪新聞に事實を告知し他方特別出版物局でも、その調査と告發とをやる。若し新聞紙が——偶然でも故意でも——眞相を侵害したと認められたならば、法定の半時形の表題で相當の日限に互つて正誤廣告をなさしめ、若しその眞相を侵害した事實が、新聞社によつて否定せられたならば、それは法廷に於いて總ての證據があげられた上、判事の判決を俟ち、そして若し犯罪が構成した時には、初犯に總資本額の十分の一の罰金が課せられ、再犯には十分の二、三犯には十分の三と一ヶ月の發行停止とを課せねばならぬ」と論じてゐる。又チャールス・ワルストンは、「出版法は如何なる種類のもので、不正なる記事が新聞によつて公布せられるのを、直接處罰すると共に、その様な記事を適當に、而も即時に正誤せしめられねばならぬ。そしてその言譯をなし、取消をなすのに新聞社をして、寸時も遲滞せしめてはならぬ」と云つてゐる。けれどもそれは甚だ

しく報道の敏活性を束縛する恐れを有してゐることに、吾々は意を拂つて置く必要がある。

こゝに又新聞紙の社會化即ち國有化が考へられて來る。ハイネーマンが、鐵道、住宅、水道、瓦斯、電氣、劇場、活動寫眞、その他の娛樂の國有化の可能と必要とを論じてゐるからには、より社會的に重要性のある新聞は、當然そこに國有化がなされねばならぬ譯である。然してこの新聞の國有化は又政黨政治の下に於いては、必ずや官報期と政爭期との有する弊をば、共に伴ひ來るものであると云ふことは、明白なる事實であつて、吾々は俄にそれに賛同し得るものではない。たゞ吾々がこゝに賛し得る所ものは、國營によつて、民間の資本主義新聞とその記事の正確性に於いて、——報道の敏活性を幾分犠牲にしても、——競争の地位に立ち標準新聞を發行すると云ふことであり、又ギルド組織による、即ち新聞業の神聖を自覺し、それに従事する人々のギルドを以て、新聞を経営せしめんとする企圖である。

要するにこれ等の惱みと企圖とは、資本主義的新聞紙に對する××の烽火である。そして現代の新聞紙は、この烽火に對して獵奇的なる煙幕を張りひろげることによつて、自己の機制をば大衆の批判から隠匿しようとする焦慮してゐる。斯くして吾々は又こゝに獵奇の世紀を、彼等か

ら押附けられてゐる。成程、吾々は時として自分で自分を購着して、そこに喜びを感ずることがある、けれども他から常に購着されたる生活を餘儀なくせしめられるといふことは、断じて忍び得なす屈辱である。

* Messers Longdon-Davis & F. H. Hayward, Democracy and the Press, P. 14.

** Angell, The Press and The Organization of Society, P. 80.

*** Heiceman, Die Kommunalisierung des Lebensmittelgewerbes, 1919.

**** Hobson, National Guids : An Inquiry into the Wage Sytem and Wayout, PP. 165-6.

—了—



定價壹圓六拾錢
郵送料掛紙銀

相會社の奇獵

昭和六年七月一日印刷
昭和六年七月六日發行

著作者 赤神良讓

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番
番番(東京) 一七四二番

東京小石川區江西戸川町 富士印刷株式會社印刷

現代獵奇尖端圖鑑

これ
は溜
息と幻
惑にハチ
切れんばか
りの魅力の書
だ。實物を見て
大膽なる獵奇尖
端の展開に驚嘆の
聲を上げぬ人はない

△絢爛・目を奪ふ大繪卷物

△獵奇の紙上大博物館だ

本圖鑑は、エロ、グロ、ナンセンス、レヴュー、スポーツ等、近代人の感覺をそゝる尖端的な風景を、総合的に展開した「獵奇」の大繪卷だ。厳選された内容は、量からいつて一大圖書館を傾けても尙ほ及ばざる程であり質からいつても、斷然創意的な企てにふさはしく、何人も追隨を許さぬ渾然たる魅力の大迷宮を成してゐる。

エロの艶媚！グロの怪奇！尖端の驚異！
レヴューの燦爛！ポーズの明劃！等々

内一	エロチック	六十三面	スポーツ	十三面
客	グロテスク	卅一面	尖端	廿八面
レヴュー	ナンセンス	二十面	奇觀	十三面
ポーズ	レヴュー	四十面	珍奇	十面
大附録	獵奇と尖端の考察	十氏執筆		

豊麗無比
近代印刷の粹
を盡して絢爛
無比、全ア
ト紙印刷、二
百四十頁、附
録五十頁
四六倍版
價貳圓八拾錢
送料拾八錢

565
274

